

我相無人相となることが出来ないのである

乞食の物語

或年の大晦日、京都三條の橋詰に老夫婦の乞食が臥して居たとの事である。この乞食が尋常の者でない、まあ乞食桃水和尚にも等しいもの。諸商人は今夜限りの事として、提燈を手に持ち三更四更の頃までも橋の上をば彼地此地らと忙がしさに往來してをる。時に乞食の婦が夫に向ひ何んと、まあ此寒さに夜の深けるまで彼の様に駆け廻るはキツイ苦勞な事では御座らぬか、まあ我等が身の上は一文一錢の貸借もなき事ゆゑ、背の中から樂々と寝て居らるるのぢやないか、ナと云ひたれば、夫の申すに、さあ其處ぢやてや、凡そ此世に生れ來たものは、尊いも卑いも智あるも愚なるも、我慢我見が五臟六腑に染み渡りをるぢやに依て死する實際に至るまで己がくんと身を高ぶり我を慕りて此身に執着するのである。例へば彼の借屋住居をしてるものが、家持顔に誇つてをる様なものぢや、此身轉は暫時の假りの宿を見た様なもの、此世の年が明けると一時片時の逗留も叶はず、

神識は未來へ宿替せねばならぬ、其の假住居假家の身分で我見我慢の家持顔をしたがるのは大きな誤りぢや、扱又此身の内に三十六の不淨物を貯へ皮を以て包み廻してあるゆゑ、見掛は奇麗な様なれど、能く詮議して見れば、大體不淨な物ばかりである。彼の鳥畜類などは皮を剥ぎ、羽を抜いて人の器材所持品にも用ひられ、内の肉は美にして賞味せらるゝこともあれど、この人間の身軀ばかりは左様な事にもならず、いかに高貴な人でも、美麗な人でも、息のある内だけのこと、息の根が切れるとソロ／＼臭くなり、送りにも居られぬ様になるものぢやから、早速野邊送りやせにやならぬ、いかに朱詰にしても、抹香を焼き伽羅を焼いても、根本の不淨を止めることはできぬ、高貴の人でもその通り、況して下賤の人は尙更穢いのである

檀林皇后の事

○昔し本朝嵯峨天皇の后を檀林皇后と申しあげた、仁明天皇の御母にて後宮の中に、多くの美人ありたれど、此御方に並ぶものは無かつたとある。斯かる榮花の身上なるも、心に深く世の無常を悟らせられ、佛法を信じ、後生の營みを成さる御聖を

ば五百領御手づから裁縫なされ、悪夢法師の入唐に托して、支那育王山の僧に供養なされ、其外法華經書寫の功德を首めとして、數々の善根を修行せられたが、生老病死有爲無常は人生に脱るゝことのできぬ掟で、皇后も重病に罹らせられ、臨終の眞際になつてからの御遺言に、我れ落命の後は決して埋葬をして呉れてはならぬ、死骸をば野邊に晒して、鳥獸の食にして呉れとのこと、其處て是非なく仰せにまかせ、て山城久世郡の原野なる草野の中に棄て置き奉りしに、日を経るに隨ひ、膨脹爛壞して、目も當てられぬ屍尸をば、雉や鳥が寄り集うて、眼をツイパミ、腸をクジルやら、實に何とも彼とも申されぬ状態となつた

我れ死なば焼くな埋むな野に棄て、

瘦せたる犬の腹を肥せよ

斯かれば夫れ初め此の皇后の容顏美麗なるを見て戀ひ慕ひし人々も、此の臭氣氣々として汚穢の狼藉たるを見ては、各々目を掩ひ鼻を塞いで四隣へ近づく者も無かつたとある。其後年月を経て彼の艸野に白骨の残りたるを拾ひ上げて、御葬送の儀式を營んだとある

斯かる貴き御身の上でも、神識の抜けた明殺はみな斯うしたもので、ちや之を彼の供舍論とやらには究竟不淨と説かせられたといふ事ぢや、檀林皇后が殊更この御遺言をなされたのは深く此身に執着し此身に迷ふ者に此身の不淨なることを示しなされたのである

骨かくす皮には誰も迷ふらん

美人といふも皮のわざなり

然るを世の人は、髪飾りや衣裳扱ては皮の美なるに眼を昏らまし、奇麗な清淨なと取違へて日がな一日、我身に執着し、人の身に戀慕して、我愛我見をつのる、夫故お釋迦様も四十九年三百餘會の御説法を成し、無我の眞理をお示しなされたのである。ぞやとの物語をしたとか申すことであるが、此れは何れ並々な乞食とは思はれぬ、實に乞食としては稀有の物語である

山々の木々の梢を傳へ來て

只一音の峯の松風

釋尊の一代お説きなされた佛教の正味は一切の邪見の根本たる我を盡し執着を

離れて眞の佛知見を開かしめんが爲めのみである、この佛知見を開くことは夢にも知らず佛が何ぢや佛説が何うぢやと己れの我見に訴へて少しの信仰もなきは誹謗佛法の大罪人といふものである

○扱て又出家を誘ふのがキツイ大罪ぢやとある併しながら破戒の僧を破戒なりといひ無智の僧を無智なりといふは敢て誘ふ譯にもなるまいけれど己れの我見を以て態と誹謗するが如きは罪業の至りである

○百縁經を按ずるに、昔し天竺の或る長者の婦人が妊娠して九人の子を生んだとある、妙なこともあればあるものぢや、併し月満ちて八人までは生み落したけれど其中一番初めに宿つた一子が残つて居て産れない何年経つても生れぬから母が老後に申すには、自分が死んでも此胎内の子は生きて居るから自分の死んだ後には、我が腹を割いて之を出せと言ひ置いたので、死んでから後遺言の通りに腹を掻きサバイて見たれば、白髪になつて居た小兒が生きて居たとの事である、其子の申すに、我れは前世に於て出家を誹謗した其の報いに由て胎内に六十年も居て、晝夜大苦惱を受けて居たのであるとこのこと實に誹謗の罪は恐ろしいものでありま

併し破戒の僧たりとも之を誘ふは宜しくないと申す事である、その事が大集經の中に
國王犯戒ノ僧ヲ罵辱打縛セバ其罪万億ノ佛身血ヲ出スヨリモ多ク阿鼻獄に墮ス
と説いてある、今時の者口を開けば先づ僧侶の悪口をいふけれど、夫れは三歸を受けて佛弟子にならぬ者がいふのであるから仕方がない、○大智度論の中に
提婆ノ弟子俱迦離等ノ如キ法ヲ信スルコト無キガ故ニ惡道ノ中ニ墮ス
とある、

俱迦離誘僧の事

外道提婆の弟子の俱迦離といふ者は、常に舍利弗、目連の過失を伺ひ求めて針小棒大の誘りを致して居た、矢前さ、或時舍利弗、目連の二人共に四月十五日から七月十五日迄の夏安居が了つて諸國に遊行なされる途中、大雨に逢はれ泊り所も無け

れば金銭もないから、陶家の宅に至り瓦釜の中に泊まられた。然るに運の悪い事に、舍利弗、目連よりも先に一人の女が此釜の中に泊つて居たのであるけれど、黒暗のことであるから、二人の尊者は如何に神通があればとて、猫のやうに黒暗が見ゆるといふてもなければ、一向一女子の居るといふことを知らずに居られた。爾るに彼の妙齡な女子が其夜の夢中に漏失でもしたものと見え、朝起きてから早々水の邊りに赴き、其の汚れた不淨を洗濯して居たものと見える。爾時例の俱迦離が其處を通りかゝり、その様を見て我が弟子の者に向ひ、此女子は夕べ男と情を通じたものと見えるぞと云ひつゝ、其の女に向ひ、其方は昨夜何處に泊まられたのぢやと尋ねられたれば、女の答へて、陶家の釜の中で泊りましたといふ、して其の釜の中に獨り泊つたのであるか、但しは外に誰れぞ泊つたものは無かつたかと問はれ、ハイ成る程宵の程は存じませんでした、が、夜明けてから見たれば、御出家が御二人、其處に宿つて今朝早う出られましたといふ。

時に俱迦離は之を聞いて心に思ふには、その二人といふは舍利弗、目連の事であるして見ると、彼等は屹度彼の女を輪姦したに相違なからうと、チツクリ吝氣の念が

萌したものと見え、夫れからチン／＼の焼餅で此事をば返ね、近所近邊村里市町城下にまで残らず觸れまはり置いて、爾うして祇園精舎に至り、面の佛の御足を取り推し頂き、恭敬禮拜し却て一面に坐しました。

然るに佛はチャーインと其の心中を知らしめし仰せらるゝに、俱迦離その方は舍利弗、目連の事をサンザ悪口言うて觸れまはつたな、能く聞け、彼等は其方の思ふが如き心の不淨なものではないぞや、その様な怪しかることをする様なものではないぞ、然るを夫れ有うことか有るまいことか、あんなに誹謗するは宜しくない必ずや長載永劫の間無間獄の責苦を受けねばならぬに由り、悪るかつたと心に懺悔するが宜いぞと出し、抜けに云はれたので、少しひるんだけれど、俱迦離の疑念は容易に晴れやらすあなたに左様に仰せられますけれど、私しは決して信ずることができませぬ、何故かと申すに、其は慳かに見ましたので、二人は屹度かの女を犯かしたに違ひは御座りませぬと答へを致して一向に背ひませぬ、佛は御慈悲の餘り三度までお呵りなされたけれど、何うしても俱迦離は承知せず、嫉妬の念は胸を焦し、ムツとした面付て其座を起ち自分の寮舎へ歸りました所が、不思議や忽ち全身に瘡を

生じ初めは芥子粒ほどのものであつたが漸々に大きくなり、豆のやうになり、粟のやうになり、又粟のやうになり、遂には瓜の大サに成つて爛れ、脇から見れば丁度火を付けて焼くやうに見え、苦しうて堪えられず、ワメキ叫んでトウ／＼其夜の内に死んで了ひ、大蓮華地獄といふに落ち、其舌を引き伸して五百本の釘を打込み、又五百挺の犁を以て其舌をすさかへされたといふ事が龍樹菩薩のお造りなされた大智度論の中に説いてあり、ます何と恐ろしいものでは御座らぬか
扱て初めから申した通り佛法僧の三寶を讚歎すれば無量の善根功徳を成就する事ぢや、爾るを却て誘ふは無量無邊の重罪を結することになるのぢやから、口にも心にも慎んで誹謗せぬやうに心懸るが肝要で御座る、先づ是れて荒増し十重禁戒を説き了つた事である」

第八席 受戒の用心

さて各々方第一最初の三歸戒と、次の三聚淨戒と、後の十重禁戒とを合せて佛祖正傳の十六條戒と申すのである。○本業璣珞經の中に、一人を教へて菩薩戒を受けし

むれば其福が八萬四千の塔を建立した功徳よりも勝れてをる、況して二人三人をやと説かせられてある、その塔といふは大坂天王寺の塔や、京都の東寺、八坂の塔などの様なのをいふ、それを八萬四千建てたよりは、一人を勸めて此の戒法を受けさせた功徳の方が勝れてあるのぢやが、夫れよりも亦大勢を勸めた功徳の廣大なことは推して知ることが出来る、扱てこの戒法を受けてからも、無始以來熏習した無明煩惱の事なれば、その習氣の罪過が無いとは云はれませぬ、それ故諸佛傳來の懺悔の文とて、説法の度毎に唱へました所の我昔所造の文句、あれを能く誦記し、毎日三返づゝ唱へて懺悔なさるるが宜い。○又毎月十四日と晦日とは、寺に於て布薩といふことを行ひ、半月／＼の罪過を洗濯する事になつてをる

ほこりのたまる袂なりけり、

とある如く、日々夜々に知らず識らず身口意の三業に造る罪過が無いとは申されませぬ、世の中に道樂をして壽命の洗濯ぢやと心得違ひをしてをる人はあれど、懺悔をして心の洗濯をする人が少ない、己に受戒をした方々は、未だ受戒せぬ人々を

も勸めて共々に此の布薩會に參詣せられ戒經を聽聞なされて思はず知らず造つた小罪を懺悔せらるゝが宜い左様さへすれば盡未來際戒法の破れるといふことはない

扱て又宗旨に依り戒法戒行は末世の人は持てぬ事の様にいひ少々戒行に志ある人をも止めさせるやうにするは恐ろしい邪見解といふものぢや殊に西方往生を願ふものは別して三部經の内觀經の中に慈心不殺にして諸の戒行を具する人は極樂淨土の上品上生ぢやと説かせられてある戒行を持たねば極樂の内でも滅多に善い處に往生することが叶はぬわけ又法華宗ならば法華經にも安樂行品に専ら戒行のことをお説きなされてある如來様は三世通達の佛智慧を以て盡未來際まで鏡を掛けて見るやうにお見透しなされ一切衆生の爲にとて説き説かせられた戒法に末世衆生の行はれぬことを説いてお勸めなさる道理はありませぬ

是れまで説いてお聽かせ申した十重禁戒の如き假令如來様がお戒めなさらぬ逆も人が人を殺すことは國王からの禁制なれば之を破ると自分が殺されるのが天下の掟である古歌にも

愚かなる身はいかならんかりそめの

世と知るだにも惜しき命を

とある生ある者の命を惜むは我身を捨つて人の痛さを知るなれば必ず殺生してはならぬといふのが第一の戒めてある

○次には不偷盜戒不與取戒ともいふ

浮草の一葉なりとも磯がくれ

思ひな掛けぞ冲津白波

草の葉一莖も断りなしに取れば不與取の罪を犯すぞとの殿しい御禁制である人の物を盗めば其主が咎めて盗人の名が付いて人の交りもならず官からは罪科に行はれますそれ故少しの物でも人の物を竊かに取らぬといふのが人間の作法なれば固より具はつてをる天下の掟である

○次は不邪淫戒不貪婬戒ともいふ

在家の男女は我が本妻と本夫との間に同衾することは天下の定法である若し之を禁制せずして他人の妻を盗み他人の夫を盗むやうな道ならぬとをしてはなら

ぬとの戒め、若し犯せば命を取らるるほどの事にもなる、人より恨まれて命までも取らるるといふは、罪科が夫れほど強いからである。如來様の戒めがなくとも古今東西この人界固有の掟といふもの

○次は不妄語戒である。虚言を言うて人をたばかることは、盗人同然の罪過にて、人間の面を被つてをるものゝ爲すべからざること、是も固より天下の定法にて、故ら如來の戒めが無くても持たずにはをられぬ掟といふもの

○次は第五の不酤酒戒である。酒は迷亂起罪の本と申して、少々は薬にもなり、人の心も和いて好きものなれど、度を過せば色々の悪事が起り、人に由りては氣が荒くなり、身持も自墮落になりたがるもの故に、其酒を賣るは人に罪科を勸めるといふことになる。一寸の見掛は好いやうにもあれど、其實は甚だ好くもないもの、是れとて佛の仰せを待たず、随分人々覺えのある事ぢや、無理に酒屋を致さなくとも、外に何ぞ活計の道がないこともあるまい、固より酒の躰に過失はなけれど、酒を過せば様々の罪過を生じ、人の心を味まし、人の正氣を失はすもの故、借狂藥と申して佛の嚴しい戒めがある、それ故在家の五戒にも不飲酒戒といふのがあつて、一滴も飲

むなとある、されど戒法には開遮持犯といふこともあつて、乾度飲てはならぬ事があり、又事によりては許して飲ますこともある、酒も藥などに用ふるは随分許してある、けれども兎角凡夫の淺ましさには分量を過してならぬ分量を過すから毒となる毒となることも知らずして、妄りに之を飲むは已に其智が昏んでをるからのことである

以上の五戒は佛の授け下さるまでもなく、凡そこの人間世界に棲む程の人は何うしても破ることのならぬ掟である、されど有りの儘にて其の通りを守れば、只好い人柄となり、又來世も好い處に生れるまでの事、菩薩の行にはならぬ然るに一度菩提心を發し、佛法の中に於て之を戒法と爲して受け守れば、未來成佛の勝因となるから之を受けよと勸め申すのである

○第六の談他過失戒は、在家出家の悪口を言はぬやうにせよとの戒めてある、善い事を悪くいふのは無論、悪口に相違なけれど、悪い事を有りの儘に云ふのは悪口でないやうに心得てをる人もあるが、爾うでない、馬鹿な者を馬鹿ぢやといへば腹を立てる、馬鹿な者でも、前は利口ぢや、豪いといへば嬉しがる、不具者を不具者ぢや

といひ乞食を乞食ぢやといへば腹を立てるから何とも言はぬかよい不器量の者を不器量ぢやといふも悪口になる貧民を貧民ぢやといへば誇ることになる故に言ふは言はぬにまざる況して戒法を受けたものが彼此と他の非をいふは甚だ不相應である又罵詈譏謗惡口雜言は誰が聞いても面白くないものである兎角凡夫の人情として自身に利害のなき事までベチャ／＼とお饒舌をしたがるものぢや殊に婦人方は好んで人言を饒舌りたがる性質を以てをる宜しくない慎まねばならぬ

○第七の不自讃毀他戒これは自分を讃めて他人を誇るることぢや他人を誇らなくとも自分を讃めればおのづと他人を誇ることになる世の諺にも畜氣と自惚のないう者はないといふがホソに爾うかも知れぬ畜氣は無い人が多いてあらうが自惚のない者は殆どあるまい自惚といふは自慢をする事ぢやこの自慢といふやつが甚だ見苦しいものぢや○下るほど人は見上げる藤の花といふやうなもので人は常に謙譲として何事につけても控目にする事が肝要ぢや自分を卑めて人を讃めるは人たるの道である

○第八の不慳法財戒在家は非道に財を慳まらず随分施しをするが宜い出家は慈悲を専らにして法を慳まぬやうにせよとの事ですイヤ在家でも出家でも財法共に慳まぬやうに餘り非道な欲をかいてはならぬとのこと財とは金銭や物品の事である法とは善き分別や智慧の事である書物や文字を教ふるも法施である愚かな人に智慧分別を授けて遣はすも法施である何事にも知らぬ人に教へて遣はすは法施である己れの身を儉約して他人を賑はすのは財施であるこの財法二施をするのが在家出家の菩薩行である

○第九は不瞋恚戒これは道理の辨へなきものが怒りたがるので道理の分つたものは滅多に怒るものではないその怒りといふものは自分の氣に逆うて來るから怒る氣に順うて來れば直に止むものぢやその自分の氣に逆うて來るといふものは自分に徳がないからの事ぢや夫れを瞋るといふは徳のないことを耻かしく思はず却て不徳を倍々重ねるといふものぢやからは是も佛の戒めがなくても嗜まねばならぬ答のものぢや

○第十は不謗三寶戒これは佛法僧の三寶を誇るなどの戒め誇るとは疑ふからの

こと疑ふから信じない、信じないから敬はぬ、敬はぬから佛を佛とも知らず、法を法とも辨へず、僧を僧とも知らずして罪を造るのである。僧とは菩薩羅漢の聖僧である。傳法弘教の高僧である。法とは佛菩薩の説かせられたお経や論部である。天地の眞理人生の大道である。佛とはこの眞理大道を發明して一切衆生に教へて下された大慈悲者大救世者である。故にこの三寶は闇夜の燈明にして苦海の船筏である。之を誹謗するは人非々といふもの、ソコで始めて我が日本へこの三寶をお弘め下された聖徳太子は觀音様の御化身ぢやといふのです。が十七憲法の第二條に篤く三寶を敬へ三寶とは佛法僧なり、四生の終歸萬國の極宗なりとお讃めになりました。然るに太子の爪垢ほどの智慧分別もなき癖に三寶を誹謗するものあるが如きは實に淺ましい料簡といふもの、已に佛戒を受けたるからには深く佛菩薩に歸依し、善惡因果の道理を辨へて、盡未來際、法を味まさぬやうにするのが佛弟子となりたる者の心得である。

此の十重禁戒は以上の如く人間として是非とも守らねばならぬ事、言はゞ人間當然の道理をお諭し下されたので、少しも無理な事ではない、無理でないから

是れほど持ち易い事はないのである。然るに性々佛陀の戒法は世間の人情に背く。末世の人には逆も持てないといふは自暴自棄といふものぢや。謔言は耳に逆ひ、良薬は口に苦しとある。口に苦しと雖も病に利あり、耳に逆ふと雖も行ひに利がある。行ひに利があるならば勤めて之を行ひ、病に利があるならば苦くても吞まねばならぬ。

この三歸三聚十重禁戒が煩惱の病を愈し、人生の大道を行くに益があるといふ事に氣付いたならば、拳々として服膺しなくてはならぬ。

此の佛祖正傳菩薩の大戒は、佛の御身に在ても餘りもせず、衆生の境界に在りても欠けもせず、全く生佛不二の大道である。

彼の金銀財寶は乞食非人が用ふるも、天子將軍が用ふるも、厘毛の増減がない如く、この菩薩ばかりは、賤しき奴婢僕従が受持するも、貴き天子將軍が受持せらるゝも、更に變りはない。

○涅槃經の中に「發心畢竟無別」とある。發心とは初めて信心を發し佛道に這入たこと、各々方の中にも今日初めて授戒に付かれた方々もあり、幾度も授戒に付かれ

た方々もあらうが、兎に角此の授戒に付くといふ氣になり、あゝ有り難かつたといふことが胸に染み込んだなれば、皆初發心の人といふものぢや、未だ發心せぬ前は只迷ひの衆生であつたのぢやけれど、一たび發心したからには、花に譬へて見ると、蕾を開いたやうなものぢや、お經の中には心華開發とある、已に授戒といへる春暖の爲めに心華が開發したからには、何時しか成佛の實を結ばねばならぬ故に、各方は、今初めて佛となるべき華を開かれたのであるから、因位の佛といふものぢや、だから衆生佛戒を受ければ、即ち諸佛の位に入る位、大覺に同うし、已る眞に是れ諸佛の子なりとある、子も亦段々と年月を経過すれば、親になるやうなもので、各方も已に三世諸佛の御弟子になられたのであるから、追々修行の功を積み、生れ變り死に代り、菩薩道を行ぜらるゝからには、必ず諸佛の親様と同様にならるゝといふことは、知れ切つた事であり、さす、されどモウ是れて佛になれるから、安心ぢやと油断を成されたならば、大變ぢや、彌々益々奮發して、後戻りをせぬやうに用心致さなくてはならぬ

次に畢竟とは、おんづまりといふこと、佛法では成佛をおんづまりとするので、是れ

以上昇進する所はないのである、二無別とは、この發心と畢竟との二つが一つである、別物ではない、茄子の花には、茄子が出来る、瓜の花には、瓜が生る、蓮の花には、蓮の實が生り、梅の花には、梅の實を結ぶ、この花と實と二つのやうには、あれど、局りは一つであるとのこと、發心の菩薩と畢竟の如來様と二つのやうには、あれど、局りは一つであるとの佛意であります、今の各方と三世諸佛とを比べて見たなら、線香の火と、お天頭様ほどの差はあるけれど、線香の火も火は火である、天頭様の火も火は火である、火の性に少しも變りはない、火の性に變りのない事がお分りになつたならば、授戒に付いた、各方と、三世諸佛と佛の性根玉が一つである、同じであるといふことの合點が行かねばならぬ等のこと、です

扱て、何うもこの授戒といふことは、希有難思議の大因縁でござる程に、有り難い事ぢやと彌々信心を勵まし、餘念なく此の佛戒を受け、佛の御家に誕生し、盡未來際この功德を忘れぬやうに信心相續が肝要ぢや

第九席 捨身に就ての垂訓

各々方今般は鈴のチリ、ンと鳴るを聞いて此方の前に來り是れまで知らず覺えず作つた所の罪業を懺悔せねばならぬ事ぢやが、その罪業には屹度覺えのある事もあり、忘れて居る事もありませう、よしや覺えて居ても人に話し苦いやうな事柄もありませう、又この幾百人といふ戒弟の方々が一々是れまで造られたことを白状された分ては、逆も一晩に懺悔の濟むことではない、十日も廿日も懺悔話しばかりを聞いて居らねばならぬ様なことになつては、非常に迷惑を感ずる事になるから、夫れには及びませぬ、及ばれては此方から眞平御免を蒙らねばならぬことになるから、此方の前に來られたならば、直壇和尚より一枚つゝお渡し申して置く、小罪無量と書いた紙札を手に持ち、口の中に潜かに、小罪無量と云つて深く頭を低げ、脇見をせずに通り過ぎるが宜しい、小罪といふは小さな罪といふことぢや、各々方は別段人殺しをしたの、泥棒をしたの、邪淫姦通をしたの、虚言を吐いて人を誑か

難シ

したのといふやうな大きな罪を犯されたことはあるまいけれど、生れ落ちてから今日に至るまで、慥しい欲しい憎い可受といふ貪瞋痴の爲めに、朝から晩まで、晩から朝まで、年が年分、人目にも見えぬ小さな罪を作り重ねて居らるゝことは、實に無量無邊である、それを小罪無量といふのでござる、小罪であるから構ふことはな

いと濟し込んでをる人が皆無間地獄の滓となるのであるゆゑ、○涅槃經の中にも

小罪ヲ輕ンジテ以テ各無シトスルコト勿レ、水ノ滴リ微ナリト雖モ漸クスレバ

大器ニ盈ツ、刹那ノ造罪過無間ニ隨ス、一タビ人身ヲ失ヘバ、萬劫ニモ復ラズ、人ノ

命ノ無常ナルコトハ、山ノ水ヨリモ過ギタリ、今日ハ存スト雖モ、明ンマデ亦保チ

とあるから、小罪ぢやからとて、決して輕んずることはてきませぬ、小罪を重んずる人が此の授戒會にお集まりになつたのである、この小罪が恐ろしいのぢや、各々方は表面から見ると皆善人であるけれど、この無量無邊なる小罪があるからには、残らず凡夫であるのぢや、三世諸佛の聖眼から御覽になれば、皆惡業の衆生である、衆生なれども、已に發心して授戒に付き、至心に懺悔捨身せらるゝからには、その根本

罪が朝日に霜の消ゆるが如く、スツカリ消滅して清浄の境界に成らるのであります。夫れから又明晩は登壇と申して、あの須彌壇の上に登り佛の子となり佛の御位に入り、爾うして佛の御血脈を相續致さるので御座る、何と希有な事では御座らぬか。今晚は懺悔が了つてから捨身の儀式を行ずるのであるが、捨身とは身を捨るといふ事ぢや、身を捨るとして首釣をしたり、身投をしたり、自害毒殺などする事では御座らぬ、捨身とは人見我見といふ邪見を打捨て、投げ出して、微塵許りも俺がくといふ拙ない根性を振り捨て、捨て、了ふので御座る、焼くと申したからとて火を以て焼くのではない、一心一向の信心といふ智慧の火を以て、無明煩惱の薪を焼き、拂うて了ふのである、昔しは頭香を焼き又は線香を以て捨身供養の誠を表したこともあり、只一身に合掌して此方始め三導師其他が佛名を唱へて、各々方を廻回する時、餘念を交へず心の内で南無歸依佛南無歸依佛法南無歸依僧を唱へて居るゝが宜しい。

第十席 血盆經涌出緣由の垂手

太凡そ人間界に生を受けし天子將軍の如き尊官貴姓にもあれ、乞丐非人の如き貧窮下賤の者にもあれ、各々彌陀如來や釋迦様に變らぬ本覺の佛心を具へぬものはない。○涅槃經にも一切衆生悉有佛性、如來常住無有變易と説かせられた、これは佛の種に貴賤尊卑、智愚利鈍の差別なきことを示し下されたのである。

我國の梅の花とは見しかども
大宮人は何にといふらむ

玉樓金殿の前に咲きしも、破家茅屋の軒に咲きしも、梅は梅にて色も香も變らぬ如く、凡そ佛性といふものは、上み王公貴人に在りても、夫れだけ勝れもせず、下は匹夫乞丐の輩に在りても、敢て劣りもせず、凡夫の如きも、彌勒の如きも同じであるから、如々の佛性といふ如といふは眞如のこと。

○眞如とは眞實一如といふことにて、有情の本性たるマコトは、貴賤も生佛も同一

にて少しも變らぬといふ事である

○佛性といふは佛は果佛とて果満圓成せる佛如來の尊稱である。性は種子因生の義にて手近くいへば佛に成る種といふことになる。斯くいへば其種は一切衆生の胸の内に凝然たる一物でもあるかといふに爾うでもない。されど發心修行して佛に成つた時扱ては本有の佛性ありと知られたのである。ソコて古歌にもある如く春毎にひらく吉野の山櫻

木をわりて見よ花のありかを

嵯峨吉野の山々に毎年櫻の花が爛漫と見事に咲くから木の中に何ぞ花の種らしいものでもあるかと思ひ冬の内に木を割て見たからとて花の種らしい物はないに由て花の種とは何をいふらむと詠んだのである。今も其の如く一切衆生に佛性があるかといふと之が佛性であるぞと尋ね求めらるゝものではないけれど修行成就した上に相好圓滿の佛に成つてから始めては立派な佛性があつたのぢやといふ事が明瞭になるのである。それ故昔の常不輕菩薩といふ御方は我が心ニ汝等ヲ敬フ汝等ハ皆當ニ佛ト作ルベシと云うて向ふ人毎に禮拜をなされたの

もその佛性あるを敬はせられたのである

斯くも貴き佛性を持ちながら何とて今迄迷うて居たのであつたかといふに、譬へば器物に水を入れて月に向へば清らかな影を宿せど、若し泥を中に入れて掻き濁せば忽ち水が濁つて月影を失ふ如く、今各々方も本有の佛性は具へたれども腹を立ては修羅道に遊び慾をかはいては、餓鬼道に彷徨ひ、愚痴を溢しては畜生道に入り種々様々のものにて清淨の心水を掻き濁したものでちやに依て珠掛けながら迷ひぬるかな貴い佛性を具へながら生死流轉の身となり果ては何時の間にかや腹の中に火の玉を手細工に拵へて何の彼のと小理窟をいうて居るのぢやてあるから先づ此火の玉の拵へ初めをよく吟味して見られたが宜い生れた時には何も知らず心があるとも火の玉が心ぢやとも何とも彼とも思うて居たのではない、それが段々育て上げられ次第に成人する程に見たり聞いたり飛んだり刳ねたり自由自在が出来るゆゑ餘んまり甘すぎてツイ狼狽へ出したものぢやうまれ兒が次第に智慧つきて

佛に遠くなるぞかなしき

斯様に動き働く自由自在の出来る身軀は俺が物ぢや俺が勝手にするのぢやと迷ひかけて夫れから色々様々に欲の皮が厚くなつて段々貧乏人となり果てイヤ何が欲しい彼が欲しい何を云うても金が先ぢや金が無ければ何うすることもならぬと不足の心ばかり起り我慢は愈々増長して何うせにやならぬ斯うせにやならぬ此事ばかりは言はずに居られぬ言はねば堪へられぬと悶躁き苦しむその堪へられぬといふ胸の内にお主は何んてあらうぞと能く吟味して見たが宜い只此の出来る息引く息が境目ぢや出た息が引かず引いた息が出なんだことならば夫れ切ぢやないか實に夢幻のやうな浮世を千年も万年も生るものゝやうに心得て色々營みを爲し芥子粒許りの菩提心もなく頭の頂より足の裏まで全軀残らず三毒五欲の爲めに満し塞がれてをる五臟より六腑を貫いて惣て是れ我慢嫉妬のみ朝より暮に至るまで罪といふ罪をば抜目なく造り溜めそれをドツシリと脊負ひ擔げて冥途に赴き兆載永劫の後迄も無量無邊の苦みを受くるといふは扱てもく淺間しい事ぢや

別して女人といふものは五障三従とて障りの多き身上ぢやに由て此の値ひ難き

佛法に入り難いので法華經の提婆品には女の身として

一には梵天王二には帝釋天王三には六天の魔王四には轉輪聖王五には佛身を得ることが出来ないといふと説かせられてある之を五障といふ又三従とは幼少の時は父母に従ひ壯年になつては夫に従ひ老ては子に従ふものなるゆゑ一生の間身を自由にする事が出来ぬと智度論や禮記にも書いてある

扱て又名山や靈場を巡禮したいと思つても夫の許しが無ければ參詣することも出来ぬ又演説や説法を聴聞したいと思つても或は夫の心を守り或は小兒を養育して容易く行くことが出来ぬ不自由なものぢや只々日夜嫉妬やら兩舌やら他人の噂やら生死輪廻の業のみを造り佛法には倍々遠かり夫や子供の恩愛の網にかゝり名聞や利養の鎖に纏まれ一日片時たりとも心靜かに暮すことが出来ないのです

何時までも明けぬくれぬと營まん

身は限りあり事は盡させず

限るある身を以て限りなきことを營み春より冬に至り朝より夕に至るまで思ふ

程のこと悉く輪廻の妄念にあらざるはなく、作す程のこと凡て墮獄の罪業ならざるはないのである。されば油断なく一寸の暇なりとも本より迷はぬ般若真空の知見を開き、自心本覺の眞如法身を信仰して、一座の説法にても骨身に染みて聽聞せられたならば多少曠劫の大因縁となつて、一度は必ず釋迦彌陀に劣らぬ佛果を成就せぬといふことは御座らぬ。○維摩經の中にも高原陸地ニハ蓮花ヲ生ゼズ、卑濕淤泥ニ乃チ此花ヲ生ズとある。又○瑜伽經にも能ク凡夫ノ身ヲ以テ現ニ佛身ヲ成就シ或ハ一念ヲ起シテ我ハ是レ凡夫ナリト言ハ、三世ノ佛ヲ誘スルニ同ジ、法ノ中ニ重罪ヲ結ブとあれば、自から俺は凡夫ぢやと云うて尻込みしては却て重罪になるとの誡めである。卑濕淤泥の如き凡夫心の中に蓮花の如き奇麗な佛が誕生せらるゝのであるから、凡夫ぢやとばかり許してはならぬ。故に他佛に歸依すると同時に自心自性の天真佛に歸趣するのが各々方の一大事ぢや、一切經と雖も固より迷はぬ我が本尊佛の開帳に過ぬぢや、斯様に申しても尙ほ遠慮深い人々は其の様に心易く自性を知るの心を明めるのと云はるゝけれど、昔しは人も上根であつたから工夫に工夫を凝して自心を明めた人もあつたであらうけれど、今は末世末

代にて人の根機も薄うなつて中々我々如きが自性を知るの心を明めるのといふ様なことは出来かねますと御辭義をする人が多くあるものぢやが、此處を能く考へて見たが宜い昔も今も心に變りのない事を譬へて聞かせませう。去年燭した燭の火を昔とし、今夜燭した火を今の世として見るに、その明しに少しも違ひはない。是れは去年の火であるから古くて暗い。是れは今年の火であるから格別に明りが強いと云ふ様なことはない。火と心とは物こそ遠へ今昔のあらう筈がない。昔しの日月星辰は今の日月星辰である。今の青山溪水は昔の青山溪水である。昔の人間も眼横鼻直なれば、今の人間も眼横鼻直である。何處に變つた所があらうぞ。尤も多少の人情風俗の浮邊に變りはありもするけれど、各々方が無始已來具有して居らるゝ所の本心に至りては、毫末許りも變りは御座らぬ。故に如來常住無有變易と云ふ説き成されたのである。てはあるけれど、女中方の身としては別して五障三從の罪科があるのぢやから、此に有り難い血盆經を受けて肌守になされたならば、その功德は廣大無邊で御座る。その有り難いといふのは、血盆經の中の陀羅尼である。それは何んなものであるかといふに

ナウマクサンマング。ボダナン。ランバザラ。キヤリマニ。シユダナウヤ。サリパン。バ。ダ。ド。ボ。ダ。サ。リ。テ。イ。ナ。ウ。サ。ン。マ。エ。イ。ウ。ン。ベ。イ。シ。ヤ。ナ。ウ。マ。ナ。ウ。ヤ。ソ。ワ。カ。ラン。サンマヤサボウ。ラン。サンマヤサツトパウ。ン。キヤラテイヤ。ソワカ。

といふのである。凡そ此の血盆經の是れまで利益の有つた事を擧げて話そうならば、中々一日や二日て盡さる事ではない。亡者が直に來て求めたこともあり、夢に此の守を願つて地獄の苦を免れた事などもあり、又現在の女人が此の守を掛けて月役の障りを免れた事もあり、又此の守を受けて身に附ければ、設令月經の下る節とも、神佛の前に出て、香花燈明杯を供へても、苦しく御座らぬ、常に此守を掛けてさへ居れば、一切時一切處に於て汚れにはならぬ、何うもお經の功德といふものは、不思議なものぢや、況して此の陀羅尼を唱へたならば、更に功德が廣大て御座る。

○昔し江州の千丈和尚といふが、信州の大澤寺に住職なされた時、大きな梵鐘を鑄られた事がありました。其時若い男共に申付て、爐輪を踏ませたるに、嫁や娘といふ様な類のが見物に來て、自分等も因縁の爲めに踏ませてとて、其の男共に交り爐輪を踏んだが、已に赤銅の沸いた頃と思ひ、(鑄型爐壺ともいふ)に次ぎ込む段になり

てから能々改めて見れば、その沸騰した金が凝り固まつて了ひ、根から鑄型に這入らぬ、爾うすると見物に來た程の者が、圓の聲を揚げて笑ふた、スルと鑄物師は顔色を變へて、何うも沸かぬ筈はないのであるが、まあ何うしたのであらうか、不審千萬て御座ると、お寺に對しては非常に氣の毒が、彼れ此れと心配しても仕方がないから、其日は夫れて中止となし、爲方がないから、口を替へて再び吹きにかゝりました。

其時鑄物師が方丈へ申上ぐるには、先日はツイ若い婦人共に汚された勢で成就致しませんでした。今日は何うぞ方丈様より役者中へ仰せ付けられました。此度婦人や尼の類をお寄せにならぬ様に願ひますとのこと、方丈も夫れは随分尤な事ぢやと云うて、其の通りにして始めましたが、何ういふものか、亦炭も發らずして、眞黒になり、金も湯にならぬものぢやに依て、鑄物師も大いに驚き、是れまでツイ此んな事に逢ふた事はないのですが、マアコリや何うしたら宜からうかと途方に暮れてある所に、或る一人の僧が申すに、コレは鑄物師が申した通り、前日若い女中共の爲めに汚された儘ぢやから、此んな怪痴があるのでせう、誰ぞ血盆經を持合せた

者はあるまいかと申すにぞ、方丈が夫れは此方が持合せてをるとのこと、然らば夫れを不淨淨めの爲め爐壺の中へ入れて見ませうといふに依り、夫れも爾うぢやと方丈も合點せられ、方丈所持の血盆經を出して鑄物師へ渡された、鑄物師は慎てそれを爐轆の中へ入れたれば、不思議や火も直に發り、銅も沸いて来て見てをる間に出來上りました、ソコで鑄物師も大いに喜び、諸人も目出度しと云うて、隨喜致した夫れから翌日摸型より出して見た所が何等の申分もなき結構な大鐘が出來上り、音聲といひ響きといひ誠に圓滿無碍なる梵鐘鑄造の大事業が成就したとある之を能く聞いて置かるゝが宜い、女人の月經は斯くも甚だしい汚れのあるものよし、月經がないにしても、大勞の血氣盛りの女人がタ、ヲを昭んだから夫れが邪魔になつたのである、その汚れをも難なく消したのは血盆經の力であつたと云はねばならぬ、かゝる廣大な血盆經が手に入るといふことは誠に宿善開發の好時機と云はねばならぬ、併しながら此事を信ぜざる人に強て上げやうといふのではない、信ずる人々には何方にても上げますから、後で申込まるゝが宜い

○校訂者云く、此の垂示の途中に血盆經涌出の因縁を掲げありたれど、今はそれを全部省略し、其の代りに予が前日法輪誌上へ尤も平話に書き述べしものあれば、それを左に編入する事に致せし也

第十一席 血盆經感得の緣起

第一 女人成佛の因縁

我がこの曹洞宗に血盆經なるものゝ行はれますのは、最早五百年以來の事であり、ます、此經は女人成佛の經として、之を女人の廣守りに掛くれば、月經の穢れを脱するともあり、又は亡者の夢に告げて求め來るもあり、又女人たるもの、死後に於て血盆地獄の苦を脱するゝとも申し傳へて授戒會などの時には、戒師となるべき人が女の戒弟に施與せらるゝ事にもなりまして、我宗の僧侶は勿論檀信徒の仲間にも盛んに流布せられてその緣起も折節は講説に及ばるゝこともあり、ます、けれど、廣き世の中の事として之を聞くも多くは聞きかぢりにて、充分その緣起を腹のドツ底へ呑込んだ人も少なからうかと思はれます、又未だ少しも聞かぬ人々も多からうかと

思はれます故に折角と此の血盆經を頂戴しても何ういふ理由のものであるやら、一向解らずにをる人々も澤山にあらうと思ひます、猫に小判といふ謠もあり、通しナンボ有り難い結構な経でも、その由来を知らないは、まあ何うしても有難味が少ない様なものでありますから、茲にお手柔かに誰人様にも容易に解りになるやうに話し申し上げたいと存じます、併し男子の方々には直接御用が薄いやうなものでありますけれど、母様もあれば伯母様もあり、姉もあれば妹もあり、又妻君もあれば娘子供もあるといふやうなもので、夫れ等の人々に之を讀ませ之を聞かせ、又は懇意の婦人に此事を傳へ知らすといふことは、人倫の上に於て最も必要の事であらうと思ひましたから、遂に本誌法輪の主題としてお話しする事にいたしました

第二 本經出現の由來

古い書付を見ますると下總國中相馬郡發戸村改めて一部村ともいふ法性寺といふ名があり、後に改めて正泉寺と名くるとあります、只今その正泉寺といふは千葉

縣東葛飾郡我孫子町に在りと申すのですが、私は此經の由来を確むるが爲め、今より十二三年前、態々と此寺へ参つた事がありますけれど、寺は町中に在りは致しませぬ、町よりも餘ほど離れた田舎の高見に在りまして、彼の名高き手賀沼を眼下に視下してをります、宗旨は曹洞宗にて、ナカノ立派な寺でありました、此寺が抑々血盆經涌出の根本道場でありますので、本の法性寺を正泉寺と改めました由來を原ねまするに、頃は人王百一代後小松天皇應永四年丁丑の四月廿四日の事でありました、が村内檀家の某氏に、年十三になる娘がありまして、忽ち譯も分らぬ奇病に取り罹り、顔色も眞青になり、物言ひの工合から、舉動の様子が、何となく憑物でもしたのであるかと思はるゝやうです、爾うして腰から下は血塗になり、まして頭の髪は蓬を見たやうに亂れ、その中から熱氣の火焰を出して、あゝら苦しやつらや堪へがたやと、狂ひまはります、その状態は如何にも不思議にして、又懼ろしいやうです、お醫者も手の着けやうがなく、鍼灸は本より寄せ付けもせず、父母親戚も膽を潰して、歎き悲み、狼狽まはりますけれど、何として見やうもなく、只茫然として騒ぐのみであります

第三 寺の住持を迎ふ

時に娘は苦しき中よりも父母に告げて頼みまするやう、何うぞあの法性寺の和尚様を呼んで下さい、ワタシ自から申したい事があるからといふものですから、親は娘の申すにまかせては呼んでやらうと直に寺へ使ひを立て、誠に相済みませんが、病人が斯く／＼に申しますから、御苦勞でも一寸お出を願ひたいと申した所が、和尚も快く承諾なされ、あゝ左様か、それは最と易い事ぢやとて早速病女のある宅へ参られました、スルと娘の慇懃に禮を述べます様子、全く平素の振舞とは違ひまするゆゑ、両親も潜かに不審を抱いてをりました、が案の如く和尚へ申上げる口上は我が娘の言葉でありませぬ

第四 死霊の昔日物語

方丈様、ワタクシの申上げることをお疑ひなくお聞き取りを願ひ度う御坐ります、妾の今申上げますことは、此家の娘としてゝはありませぬ、只當家の娘の口を借

りて我れの昔日物語を致したのであります、妾は最明寺時頼の女尼、御寮法性といふ比丘尼でありましたが、我が父の時頼は我がために寺を建て、我が名を取て法性寺と名けたので御坐ります、然るにワタクシ活きて世に在ります時、妾こそは比丘尼にて、外から見れば殊勝らしくはありましたが、けれど、其實は出家の心を心とせず、身に戒法を持つてもなく、徒らに浮世の榮華に耽けまして、私かに淫欲を行ひ、頻りに邪淫嫉妬の思ひをのみ心として世を欺き法を味まし、神佛の前をも憚からず、因果の道理も辨へず、放逸無慚に光陰を送りました、が齢七十にして、娑婆を去りました、命終るやいなや、直に血盆地獄に墮ちました、數の限りもなく、有りとも有らゆる苦みを受けました、さてその血盆地獄の苦みが脱れたかと思へば、更に惡業の招くところ、今は手賀沼の中の大蛇となりまして、頭には十六の角を戴き、日々夜々血盆の苦みを受けてをるのであります、若し我が言ふことにして、お疑ひもありませんことならば、その驗しを御覽に入れ申さんとて、白紙十枚ばかりを取寄せ、自から膚身を拭うて差出せるを見るに、眞赤な血が垂垂と滴ります

第五 法性の塚を發く

娘は更に言葉を續けて申しまするやう、ワタクシの苦みは是ればかりでないといふ證據を御覽に入れたいと思ふので御坐りまする、ワタクシの墓は五輪の石塔になつて居たのであります、鎌倉天下の亡びまするにおよび敵兵のために毀され、今は寺中のあの大きな松の樹の下に埋れてをります、若し御不審でありますならば試みにあの松の根を掘て見て戴きたいものですと、娘は尙も苦みもがき、あゝ堪まらんと大聲を出して泣き叫びます

ソコで和尙は直に寺にかへり、門前の百姓共に申付けて、松の根本を掘らしめられた所が、案の如く五輪の石塔がありました、その石塔が土中に埋れをるにも拘らず、ビシヨ／＼と血塗になつてをりますから、水を以て之を洗ひまするに、土は除いても血は尙ほ依然として流れ出てます、ナンと不思議なことではありませぬか、この一事を以ても渠れ法性尼の魂魄が、冥土にありて血盆の苦を受けてをるのであるといふことは疑ひもなき事になりました

第六 血盆の苦を問ふ

法性寺の和尙は更に又病女の宅に到られ病女に向つて申さるゝやう、其方の言葉に隨ひ松の樹の下を掘らして見た所が如何にも其方の云はるゝ如く五輪の石塔が埋れて居たのみか、その石塔がツブ／＼と血塗になつて居たので、如何にも驚いた事であるが、全體その血盆地獄といふは此方も一向に存せぬ事であるが、其中の状態は如何なる次第のものであるか、此方および世人のために一應話して貰ひたいものぢやと問はれました——時に病女は咽び入て對へを爲しかねてをりました

たが、少頃してから申しまするやう、左様で御座ります、凡そ女人と生れました者は、いかに位の高いものでも、富貴なものでも、後生菩提の心懸なく、信心淨行の志なく、貪婬嫉妬の念深ければ、その罪業の積り積りて血盆の苦因となり、其身より出す所の經水不淨の惡血は、流れ／＼て山神水神および海河の靈を汚し、遂に血盆地獄の報いを受けますので、晝夜六時にその汚れた血を飲まざるゝのであります、飲まないとすれば畏ろしき牛頭馬頭の鬼

共から鐵の棒で打ちつ打たれつ水火の責苦に逢はさるゝのであります
 又夫ればかりではなく血盆獄中の四邊には鐵のやうな堅い背や爪の尖つた虫が
 澤山にありまして罪人を惱ましますそれが皮を破り肉を喰ひ髓をすゝり骨を碎
 き腸を掻き裂く等その苦痛は何とも彼とも言葉で以て述べることは出来ぬほど
 てあります斯かる中にも折々は血の池に五色の蓮華が咲きまして天に生るゝ人
 もありますそれは何うかと申しまするに惡業にまかせて一度血の池地獄に墮ち
 ましても其身娑婆にありし時善根功徳を爲したからの事であり又はその子
 孫が懇ろなる追善の功徳に由りまして天に生るゝ者もあるものであります何うぞ
 方丈様ワタクシをお救ひ下され速かに血の池地獄の苦みを脱れさせて下されま
 しと

第七 出獄の法を問ふ

時に和尚の申さるゝやう出来得ることならば如何なることでも厭はぬ覺悟であ
 るがソモ血盆地獄の苦ほどの様にすれば脱るゝと思ふのであるぞやと尋ねられ

第八 地藏菩薩に祈る

たれば病女の申すに左様で御座ります凡そ如來一代のお經文は澤山にあります
 けれど其中に血盆經といふのがある筈で御座いますそれを七日の間毎日一千卷
 づゝお読み下され且つ書寫して下されましたならば今の蛇身を脱れ血盆地獄の
 苦患を脱るゝことが出来ますそれはワタクシ一人ばかりでなく都て世の中の女
 人も助かり獄中の衆生も資かることとてありますと云々
 和尚重ねて申さるゝやう其んな經は是れまでツイぞ聞いたことも見たこともな
 いのでそれを讀めといふにはチト困つたワイな其方は何んなお經がどこに在る
 と思ふか
 病女それは申し上げますが法性寺の地藏菩薩はわが父時頼の設けました御尊像
 にて殊に靈驗の新たな地藏様で御座りまするにより誠を込めてお頼みにさへな
 りますれば屹度お授け下さるに相違ないと思ひますと云つて又消入る許りに苦
 み打ち仆れて了ひました

夫れから法性寺の和尚は早速寺に歸り、地藏講會を修行し、衆僧と共に菩薩に祈誓し、南無六道能化の地藏願王菩薩、何うぞ我に血盆經を授けたまひて、迷ひの衆生を濟度せしめたまへと一心不乱になつて深く禪定に入られました。其夜丑の時、も過ぎて寅の刻にも及ばうかと思ふ頃は、水の音だに静かになるといふ時刻にて、此頃は誰れしも睡むたうなるので、和尚も坐したまへに、少しばかりトロリと居睡りをせられ、ました。スルと不思議や、地藏菩薩は八旬ばかりの老僧と現はれたまひ、右の手に錫杖を持ち、左の手に寶珠を握ぎらせたまひ、光明赫々として、和尚に告げたまひけるやう、其方は今經文を得て、血盆の苦を救はんとのこと、は誠に殊勝の至りであるほどに、今は龍宮城に納まる所の血盆經を請ひ求めて、其方に與へてやるに由り、夜明になつたらば、手賀沼に往いて頂戴せよと仰せられたかと思へば、忽ちおすがたが見えぬやうになり、ました。和尚も亦夫れと同時に目が覺めました。が、夢中にありしことは、一部始終記憶にと

とまりまして、飛立つほどに有難く感じられ、夜が明くるやいなや、早速衆僧を率ゐて、手賀沼の邊りに往き、潜かに菩薩の名號を唱へて居られました。スルと不思議や、水上が俄かに動揺し始め、波瀾滔々として、龍門の如くにうづまき、ました。が見てをる内に、一莖の蓮華が湧き出て、ました。而もその莖の真中に、一巻の血盆經があり、ました。あゝ是れぞ正しく、地藏菩薩の授け下されたお經文であるぞと推し戴き、三拜九拜して、手に把り、御覽になれば、不思議や、水中より湧出したにも拘はらず、少しだに濡れてをりませぬゆゑ、歡喜踊躍に餘り、それを持ちかへり、一周日の間、毎日書寫し、且つ一千巻づゝ讀誦されました。所が病女は、苦痛日々に輕くなつて、快くなり、ます。ゆるゑ、その父母は、勿論娘も非常に慶び、方丈様のお慈悲に依つて、この龍身を脱がれ、血の池地獄の苦を免れんとするは、誠に有り難い仕合せなりと、欣々然として、樂んでをりました。

第九 血盆の苦を出づ

斯くて書寫せしところの血盆經をば、法性尼の墓所へ納められました。が、七日を滿

ずるの夜半におよび法性尼は忽ち虚空に現はれました、その姿は恰ながら繪に書いた天神を見るやうです、その聲高らかに感謝して申します、やう法性寺大和尚の大慈大悲をもて、わが毒龍の醜き形轉じ、血盆の責苦を脱れさせて下されました、今はお蔭を以て、切利天上に生れ替る事となりました、まことに有り難い事であります

その救はれたのは我身ばかりではなく、血盆地獄の罪女は残らず、永劫の苦患を脱れたのであります、實に御禮の申し上げやうも無い位であります、何うぞ願ひ申し上げたいのは、此經を廣く世の中に弘められまして、未來永遠の女人をして、血盆地獄の責苦を脱れしめらるゝやうに致したいものです

といふ其聲の未だ絶えざるに、忽ち紫の雲が襲撃しまして、法性尼は其中に蔽はれ見えぬやうになりました、良久しうして紫の雲もまたおのづと消失して了ひました、この事をば、法性寺の和尚及び衆僧は申すに及ばず、村民の者までも耳に聞き目に視た者も澤山ありました

第十 村名寺號を改む

時に病女は家に在て大いに喜び、あゝ何うもこの様に嬉しい有りがたい事はない、是れまでの苦みがスツカリと無くなつて了ふた、有り難い仕合せであつた、さあこれからワタシは歸ります、大きに此宅の娘を惱まして濟みませんでしたといふや氣絶して地に仆れ伏しました

が食頃にして蘇りました、茲に不思議なるは、十日ばかりあれほど苦みもがいたものが、眠りの覺めたが如く、ケロリとして何等の覺えもありませぬ、それはその善法性尼が娘の口を借りたまての事にて、娘に何等の關係もないからのこととす、夫れから、一部の血盆經が沸き出でましたゆゑ、その發戸村を一部村と改め、正しく泉の如くに涌き出でましたから、法性寺を正泉寺と改むることになつたのぢやさうです、其後は法性尼の五輪の石塔もスツカリと乾いて血の匂ひだになくなり、今日でも其の石塔は正泉寺の境内に在りますので、私も親しく之を見て参りました

尙ほ大きな石に女人成佛道場の六字を刻み込んで立てられてあります。又地藏尊も立派に莊嚴してあります。その地藏尊の御尊影を摺って摺物にせられてあり血盆經も摺物にして施すやうに、又膚守になるやうにしてあります。短い經でありますから、今の世に天下に行はれてありますのは、皆この正泉寺から出たのを寫したものだと思はれます。

さて其の手賀沼といふは周圍が三里餘もありますので、其上を往來するには小舟で渡すことになりまして、私もその舟に乗つて正泉寺へ参りました。その一部村、今の我孫子に最明寺殿時頼公の逝去せられた地があると申すこととあります。かの法性尼の俗名は安姫と申すのぢやさうして、又蛇身を脱れましたから、寺號をも大龍山と改めたのぢやとも申します。

血盆經の縁起は以上の通りで、法性比丘尼の爲めに、法性寺が建てられた。その法性寺が正泉寺と改められ、發戶村が一部村と改められ、公々然と女人成佛道場と石に銘刻せられて今日に至る位であるから、乾度左様な事實があつたのであらうと思ふのであります。されど徒らに之を疑ふ日には、實際のなき事てあります。

から、アタマよりお話しはできないのであります。故に彼れ此れの理窟を考へず、疑ひを起さず、有りの儘にお信じなされた方が宜しう御座います。疑ひの上に疑ひを起せば、何處までも疑ひの晴れるものではありませぬ。

第十二席 滿戒の垂語

扱て授戒も滞りなく調ひまして御互に珍重な事で御座る。佛法では最もこの因縁を貴ぶのです。中々何うして多生曠劫の善因縁が無くては、逆も今日斯うして戒師となり、戒弟となり、又同戒の兄弟となつて因縁を結ぶといふことは出来ぬ事。御座るに由り、是れより以後とて、この大因縁を忘れぬ様に心懸けらるゝが肝要である。尙又此間から度々申した通り、戒法を受け、血脈を授かつたからには、全く佛様の御子に相違ないと申すもの。佛様の方からは一切衆生が皆我が子であるとは仰せられてあるけれど、衆生の方で其事を知らなければ、他人も同様已に佛様に歸依して血脈を授かる身となつたのは、丁度親子の名乗合が出来たやうなものであ

二百二十八
る斯く親子の對面が出来たからには、是れから後、別して其の心がけが大事で御座います。佛の眞の子となつたものが互に腹を立てたり、角を生したりしてはなりませぬほどに、銘々の内へ歸られても、必ず邪見な心を起さず、上を敬ひ、下を憐み、家内の和合が第一で、御座るに依り、左様心得られまして、随分お達者で、家業を大事に慈悲心を専らにしてお暮しなさるが何よりのこと、左様なら、是れてお分れ分れ路を左のみなげくな法の道

また逢ふ國もありとこそ知れ
別れても別れられぬは法のみち
此世あの世の伴となるゆゑ

第十三席 嫁姑仲直の話

此れは昔し京都の五條邊にあつたといふ事實の物語で、御座るが婦と姑と仲の悪いのは世間に数々ある事なれど、是れはまあ餘程珍らしい仲の悪いのでありまし

た爾うかと申して子供はあるし出るにも出られず、居るにも居られず、苦み悶くばかり、日々の悪業が積りに積つて、彌々倍々烈しくなり、朝から晩まで、双方何れも劣らぬ角の生し合ひ、睨み合ひ、言ひ合ひ責め合ひばかり、餘りの辛らさに堪へ兼ね、或時は二三日も親里へ歸つては見ても、二人の子供が母様くといひつゝ、跡を慕うて泣き叫ぶゆゑ、子故に責められ、胸を押へて戻つて見れば、また相も變らず、姑婆さんに責められる、盆も正月も節句も休みといふことはなく、互に責めつ責められつゝ、七月の十六日は、地獄の釜開なれど、爰の家ばかりは休みなしに、火宅の苦み無間地獄も斯くあらんかとはかりに思はるゝほどである
嫁の方では死ぬにも死なれず、如何とも仕様がなないと云うて一二年の内に死にさうな姑婆様でもなし、世に云ふ之が本當の金鎧婆様といふものぢや、世間に親殺してあるの主殺してあるのといふことのあるのは、前世に敵同士の報いとはいへ、總じて手前の機に逆らへば、憎いといふことは誰も知て居るから、直に銘々の心の源へ立ち歸つて見さへすれば、事なしに収まる事なれど、互に立歸ることが出来ぬからの事ぢや、それ故日々積りくゝて、火宅の苦みとなるのである

其處を佛様は因縁とも因果ともお説きなされて過去世に於て自分が作り置いた通り此世に於て受けねばならぬと仰せられたぢやに依て兎角悪い因縁を結ばぬ様に心掛らるゝが肝要ぢや

扱て彼の嫁は出るにも出られず死ぬにも死なれず何うにも斯うにも仕様のない事になつて来たソコで人の心は恐いものぢや嫁は遂に婆様を殺して了ふ氣になりました婆様だに殺して了へば親子四人が助かる事と決心の臍を固めました恐いものでは御座らぬか伺犬に手を噛まれるとは此事ぢや臣にして其君を弑し子にして其親を殺すといふも一朝夕の事ではない苦に苦を累ね迷ひに迷ひを重ね無間地獄の底に墮ちては壁の中へ塗り込まれた様なもので後へも先へも行くこととはならぬ此れは餘所事ではない嫁姑ばかりの事ではないぞ皆々の腹の中にある事ぢや心の源へ立歸ることが出来ぬと只向ふへばかり附き廻つて本心を失ふから色々様々の事が出来るのである婦が姑を殺す氣になつたのも僅かな事からぢや返事の悪いのが火宅の始まりぢや

あい／＼と返事よければ睦まじく

心に不足あれば返事

吉の川その水上をたつぬれば

律の雫はぎのしたつゆ

初めはホンの僅かな露雫ほどのものが後には梓差しても渡られぬ大川となる恐

いものぢや

嫁は何うぞ知れぬ様に殺したいものぢやと色々工夫して居ましたが平素念比にしてをる醫者殿の所へ行き何うぞ私に毒薬を下さいましといふ醫者殿は聞いて夫れはまあ大事なことぢやが全棘お前さんは毒薬を申受けて何にさつしやるのぢやと問ひかけられたスルと嫁嬢實は斯様／＼の次第でモウ何うにも斯うにも堪まらんから御厄介になりたいものと決心して参りましたと一部始終の物語をしお耻かしい事ではありますすが親子四人が助かる事御座りますほどに何うぞ御慈悲に毒薬を與へて下さいましと頼む

この醫者どの中々分別のある人で溜息を吐き夫れはまあ氣の毒千萬な事ぢやと暫時の間思案に暮れて居られたが懸て合點せられた様子イヤ委細心得ました如

何にも爾ういふ事ならば毒薬を進ませうが、それに就ては私しのいふ事とも聞かじやれ、苟くも天命の性ある人を私し事の恨みを以て殺すときは、其代りにソナタの身に報うて、子供が死ぬるかソナタが氣狂になるかせにやならぬ、夫れも氣の毒ぢやに依て、その事を遂げやうとするには、三十日の間ソナタが修行をせにやならぬが合點か何うぢや、その修行とて其んなに六ヶ敷い事でもない、只婆様に一言も口答をする事はならぬ、設令どの様な無理な事を云はしやれても、只ハイ／＼と質直にして、一寸でも腹立てさす様な事をしてはならぬ、まあ一口にいへば、是れから三十日の間にソナタ一生の孝行を取越して勤めねばならぬが、夫れが出来やうか、夫れが出来なければ毒薬を進めることはならぬ、夫れさへ出来るならば、蛇皮毒薬を進める

○嫁、ハイ／＼イヤモウ、婆々様さへ死て下さることならば、三十日は愚か、五十日は百日でも勤めませう…… ○醫師、あうよし／＼夫れさへ出来れば氣遣ひはない、それさい承知の事なればモウ今日歸りしなから何ぞ土産でも買うて機嫌を取らしやれ、如何やうな小言が出て、決して口答はなりませんぞ、只ハイ／＼合點かな

假りにも腹立てさすやうなことはなりませぬぞとハイ／＼段ましますたと云うて立ち退いた

さて嫁はよく合點したものと見え、歸り道にて婆々様の好きなお焼を買うて冷めぬ様に懐へ入れて内へ歸つた所が婆々様は内に待て御座る、嫁は何處へ無沙汰て行きやがつたのであらうぞ戻つてうせたら何ぞウンと窘めて遣うと思つて居る所へ歸りました……何時もの事なれば嫁どのもツン／＼してをるのぢやけれど右の事があるものぢやから、ニコ／＼として戻つて來ました、モーシお婆様只今歸りましたッ、お辭儀を申して行く筈でありましたが、何の氣も付かず黙つて外へ出ましたのは、重々私がワル／＼御座りました何うぞ堪忍なさつて下さいませ、これはお土産であります、何うぞ暖かな内に召し上つて下さいませ、と差出せは、婆様如何にも恐い顔をして、竹の皮に包んだのを引つたり、此賣買の高い時分に如何にも澤山さうに錢金を使つて貰ひますまい、この錢で何ぞ野菜物でも買ふたら、明日の晝のお菜があるのに、此んな餘計な物買ふ世帯知らずではないかと、呵られたけれども嫁は只ハイ／＼と許り口答は致さぬ、夫れから又御夕飯時分になると、好

い茶を入れ、その片手に婆様のお好きな胡麻味噌酒壺をタツブリ使うて拵へサア
 お婆様お上りなされませといふ。○婆様は何うした事かと疑ひ目をチロ／＼とさ
 せコリヤ何ぞいの榮耀らしいソナタ参らつしやれ俺は何時もの通り香の物の割
 んだのでようごんすと、膳棚からガタ／＼とお膳を引摺り出し、サツサと夕飯を食
 うて了ひ、又煙艸盆を引寄せて、薫べかける……嫁は子供の夕飯を了ひ、ソロ／＼
 と片付、ホンにお婆様朝から其様にして、御座つては御退屈して御座りませう、チツト
 お肩でもサスツて上げませう、とてソロ／＼撫てかけるスルと、婆様變な面付をし
 て是れ嫁嬢何をサツシヤルのぢや、其様にして貰はんでもようござんす、○嫁はハ
 イ／＼といふ許り、一言の口答もせず悪い顔もせず神妙なもののぢや、それから佛様
 へ明しを上げたり、線香を立てたり、婆様の着物を疊んだりして子供を寝させ、其處
 らを片付まはり、お婆様モウ御休みなされては何うですと、寢床を敷きかける、婆様
 は益々變に思ひ、イヤまだ俺はお前から寢床を敷いて貰う程ではゴンセヌと蒲團
 を引つ被つてコロリと横になる、嫁はハイ／＼というて裾を押へたり、扣き付けた
 り、枕元へ煙草盆に火を入れ、枕屏風など引きまはし、チトお婆様御み足てもサスリ

ませうといふ……婆様は曰くイエ／＼、俺は何處へも行きはせぬ、何も足がダル
 イ事はゴンセヌ……ハイ／＼嫁は胸の内に思ひけるやう多寡／＼三十日の命
 何とても小言を吐かるゝが宜い、追付この鬼婆々め思ひ知れと云はねばかり……
 されど表面には少しも見せず、これも局り我身のことぢやと我慢してをる。○扱て
 又その翌日朝も早うから起き、飯拵へをして奥から退入口まで奇麗に掃き出し、雑
 巾をかけお婆様モウおひなりになりませぬかといふ。○婆様何時もならば寢床
 からヤイ／＼というて寤りかけるのぢやが、今朝は寢過してビツクリと目を開き
 嫁に先を取られ、其處らチロ／＼と見廻しても何一つとして小言の云ひやうがな
 いものぢやから……アイ今朝はチト頭痛がするけれどモウ起きねばなるまい
 と茶を濁し、愚圖／＼と起きあがり、何時もの通り手水を使い、其間に嫁はチャンと
 飯拵へをいたし、何時もの處へ座蒲團を敷き、煙草盆に火鉢を直し、塙取りをして待
 ち居る、婆様は手水を使いながら、何ぞ見出して小言を吐いて嫁を寤め上げてや
 らうと思つても、何一ツとして言ふことがない、さても無拍子なものではある、何事も
 云はず、苦々敷い面付をして朝飯を喰ふ、かくて

○嫁は婆様の給士を了ひ其邊片付けて髪を撫で付け申しけるやう……エ、お婆様私是一寸妹の處へ往つて参り度う御座りますと少し許りのお隙を願ひます何に直に晝前には歸りますからといへば ○婆様一調子を上げ何うなりとも勝手にサツシヤレ……嫁はハイ／＼と云うて又かの醫者殿の所に住き昨日からの次第を残らず物語したれば醫者殿は聞いてウン夫れてよい早速藥を拵へて置きました進ぜサツシヤレと奇麗な重箱に黒餡餅を二三十許り容れてある此中に彼の物が仕込てある急に験しが見えるやうにするを目立てワルイ自然と病氣で死なサツシヤッタ様にしないと跡で苦情がてるのみかもし之が官へても知れると大變な事になるからのう昨日も云ふた通り多寡／＼三十日の間ぢや程に逆ものこと婆様の足納サツシヤる様に力一杯心を盡し死なれた後で残念の無い様に随分孝行サツシヤレこれ嫁どの婆様が何を云はサツシヤレてもハイ／＼ぢやぞ合點か

○嫁ハイ／＼畏りました何から何までエロウ御厄介になりますと重箱を提げて立歸る……お婆様只今歸りましたと云うても婆様は恐い顔して嘔いて御座る

○嫁が熱々婆様の顔を見るに何うやら鬼の顔に見える手に持て御座る煙管は鐵の棒の顔に見える、イナ之を見る嫁も亦外から見れば鬼が佛の假面を被つてをる様にも見える

嫁は此處が大事な處ぢやと思ひ頭を低れ手をつかへお婆様これは妹の所からアナタに上げて呉れいと云うて寄越しました不加減ではありませうけれどナトお上りなされて下さいませとて差出せば……如何に邪見な婆様もマンザラ憎くもないと見え別に世辭もなく引寄せて一ツ二ツ食うて跡は佛壇の下へ入れて置かるゝ

○嫁は潜かに思ひけるやうサア爲しやつたぞモク占めたものぢやと獨りて悦に入てをる

夫れから尙々心を盡し氣を付けて其後は毎日／＼色を替へ品を替へ土産物に事寄せ退屈サツシヤル時分には酒の肴を拵へて進ぜたり或は好い茶を入れて餅を焼いたり庭へ下りサツシヤルと草履を直して杖を充行ひ腰をかへたり三度の御飯には何になりとも婆様の好きな物を拵へこれも澤山しては氣に入らぬから

少しづつ拵へて御機嫌を取り寝起には五臓を撫て摩り何事に付けてもハイと云うて介抱を致すものぢやに由て……サシモに鬼の様な婆様も追々に心が柔かになりコリヤまあ何うした事であらうぞ此様にせられては何にとて腹を立てる手掛りがない小言を吐かすにも便りがない少しも嘴の容れ所がない據なしに佛壇でも掃除をし佛様でもないぢくつてをより仕方がないお経でも讀ひより仕事がない婆様潜かに思うやう何ういふものか知らんが此間から何うも拍子が遠うて来た妙な事もあるればあるものぢやハテ何うも合點が行かぬ彼の嫁には何ぞ魔でも附いてをるのではあるまいか但しは高僧善知識からでも教訓されたのではあるまいか不審な事もあるればあるものぢやあのみあ邪見であつた嫁が毎日夜々の介抱残る所もなく親切に氣を付けて呉れるので何うも機嫌が抜けて了ふた我儘は己れ一人の様になつてこの婆々も何だか尻がこそばい様になつて来た元々の事は鬼もあれ角もあれ今の様に彼れの心が改まり如才のない所を見れば何もあの人に悪い所は一ツもない己れはまあ是れまで何うしてあの嫁が憎くかつたのであらうか昔は鬼もあれ今では少しも憎

い所はないぞとソロ／＼目が覺めかけて本心に立歸りかけたサア此處が大事な所ぢや地獄の罪人も黒金の帳の消える時節がある是れからが成佛の段ぢや此時婆様の本心の光明がチラリと現はれかけたのぢや有難いものぢや

傀儡師首にかけたる人形箱

佛け出さうと鬼を出さうと

鬼を出すのも佛を出すのも同じ一ツの傀儡師ぢや善心の起るのも悪心の起るのもその本源は一ツである

○嫁は一途に三十日の高が括つてある故彌々張込て孝行をする婆様は益々漸かしくなつて来て思ふやうハテな心得ぬこと彼の嫁に何處が悪いのであらうぞ何う見ても悪い事は少しもないのに是れまで何であゝも憎くかつたのであらうぞい能々思つて見れば如何さま私しは大いな業人ぢや………末後の水を汲んで貰ふもアの人より外にはないのぢや其上可愛我がムスコに連れ添ふ大事の嫁を憎んだは何事ぞとコロリ料簡が入れ替つて了ふた有難いものぢや

アノ皎々たるお月様が黒雲の爲めに隠されて、我が真如の月を奪はれて了ふた
ことの口惜しさよと一念螺旋の戻りかけたは不思議なものぢや黒雲とは何の
事であるか即ち三毒の煩惱ぢや中にも嫁御が憎いと凝り固まつた根性、あれは
瞋毒の固まりである、瞋毒は何時でも反對の境に於て起る、その代り順境に向へ
ばコロリと變じて来る

今までは鬼婆々ぢやと思ひ詰めて居たのぢやけれど、心機一轉して本心の光りが
出て来ると不思議なものぢや、今度はソロ／＼婆様の方から嫁御の機嫌を取るや
うになつて来た、是れコナタ此の寒いのに、チャット片付て早く炬燵へ當らつしや
れ……

○嫁はハイ／＼なに私は若いもので血氣が壯んでありますから別に寒い事は御
座りませぬ、アナタは嘸かし此の寒い時分て冷になつたら御持病が起るかも知
れませぬから、何うぞ澤山に着物でも召になつたら宜いてせう

○婆様イヤ／＼私は此間から大分心持が宜う御座る、案じて下さるなと、嫁姑の睦
まじさの加減、マルて前日とは打て變つたものぢや

○嫁の心は嘘ぢやけれども、浮邊の勤めが眞實ぢやに由て、婆様は次第／＼に嫁が
可愛く成て来たのである、○夫れから吝嗇坊の婆様が自身の容物に手繰込めて置た
ものを取り出しては嫁に遣つたり喰はしたり、正直なものぢや、嫁は何を云うても、ハ
イ／＼私は若い身軀の事であれば別に御氣遣ひは御座りませぬ、アナタは何うぞ
御不自由のない様に成されて下さいませ、○婆様イヤ／＼爾うては御座らぬ、年寄
が物貯へて何に仕様ぞと、婆様は段々心持が面白くなつて来ると乗氣が来て、篋筒
の抽匣からも色々なものを取出し、コレ其方の下着がキツウ損じてをる様ぢや、之
をまあ着やしやれと、惜み氣もなく、婆様急に大氣にならつしやつた、宜うしたもの
ぢや

○心持さへ嬉うなると何も欲はない、欲といふも怒りといふも皆心の事ぢや、惡に
強いものは善にも強い心さへ足納すれば直に極樂となる
足納をするよとせぬとの胸の内

地獄もあれば極樂もあり
前日は婆様の顔付が鬼の様であつたが、今はコロリと變り、観音様か、地藏様のやう

にニコ／＼と嬉しうになつて来て、嫁の顔色の悪いのを察して是れソナタは此間からキツウ顔色が悪い(悪い)等ぢや毒殺せやうといふ陰謀があるのぢやから思ひ内にあれば色外に現はる様ぢやが何處ぞ悪いのかや、今頃らうて下さると子供の難義は申すに及ばず、俺が第一迷惑をする事ぢや、若し食事でも味が無い様ならは何でも口に合ふものを拵へて上げてよし、又勝手に拵へて喰べさつしやるが宜い、何でも煩はぬ様にして下されやと、眞實込めて我子の如く、嫁が可愛く成つて後には田も遣ろ、畔も遣ろといふ様になつて来た

○扱て詰らぬものは嫁どのぢや、胸算用がガラリと違うて了ひ、是れはまあ何の事ぞへ、一向譯が分らぬ事になつて来た、アの婆様には何ぞ取付て居やせぬか知らん、サツバリ合點が行かぬ

○是れまでは生れつきの鬼婆々の様に思つて居たのが、此頃の様では世間でも餘程希れな佛婆様ぢや、あの婆様を殺さうとは、扱ても勿躰ない、よくまあ罰が當らなんだ事ぢやと、嫁も亦目が覺めて來ました、有難いものぢや、雲晴れて後の光と思ふなよ

元よりそらにありあけの月

元より眞如の明月は備はつてをるのぢやけれど、本へ立歸る氣の付かぬ内は、皆我れが／＼に掠め取られてをる之が宜うしたもので、初め嫁の心の内では婆々様を殺す氣であつたのぢやけれど、浮邊の行ひが眞實ぢやに依て、鬼婆様が直に佛婆様に成り變つて了ふたのである

○是れて各々方よく合點なされたが宜い、口て何の様に云うても、心て何の様に思つても、身軀に行はねば役に立たぬ、何でも彼でも身に勤めねば利益がない、それ故朝夕己が爲す所の業が何よりの大事ぢや、古歌にもある如く

眞似をせよ、主人へ忠義親へ孝

ひたものすれば本眞とぞなる

○眞似ても宜い、眞似が本當になるのぢや、マナブとはマネスルといふ事ぢや、由て善い眞似は願うてもせにやならぬ、眞似とはマ〇コトにニルと書いてある、處に似てはいかぬが實に似るは希ふ所である

○今度は嫁殿の心が本眞になり、前日の夢が覺めて來た、コリヤ斯うして居る所て

はないと心に合點し直に醫者殿の所へ駆け馳せて行き、モウシアナタあは申しました。が何うぞ婆様の死なしやれぬ薬を早く下さいましと手を合せて頼む。醫者殿は之を聞いて、夫れは何うも合點の行かぬことぢやないか、三十日間受合の治療が、まだ二十日にもならないのに何うする料簡なのぢやと。

○嫁どの、イエ／＼何うの斯うのは御座りませぬあの佛様のやうな婆様を恨んだのは全く私の料簡違ひで御座りました。あの先日からの毒薬の消る様な御薬を早く下さいませと泣付く。

○ソコで醫者殿は能く其の謂ふ所を聞き、篤と其の様子を見て、其んならソナタあの婆様を殺す氣はモウ少しも無いのか。○嫁、アナタ勿躰ないモウ／＼何うして嘔吐を吐きませうぞと改悟の色が面に現はれ聲に現はれて少しも偽りが無い。

○時に醫者どの、は涙をバラ／＼と流して申さるゝやう、マ、よくも其心に成つて下さつた氣遣ひサツシヤンな何も初めから毒は少しも進せてはない、お前さんがアの婆様を殺さうといふ氣になつたのは、憎い恨めしい辛いといふことを思ひ詰めて、サツシヤッタからの事ぢやが、マア併し何うしたら双方に怪我がなくて済むで

あらうか何うしたら都合よく家庭が治まるであらうかと色々工夫して進めた事であつたが、首尾よく參つて何より御目出度ことぢや、尙ほ是れからが大事ぢや程に随分後戻りのしない様に大切に孝行さつしやれ、三十日が過ぎたからモウ宜いわと後戻りして角の生し合ひをしてはならぬ、その孝行を怠ると復た再び殺害の恐しい心が出まゐるものでも御座らぬが、まあ互に心が打解けて永く家内が和合して、その醫者殿も慰撫にせられたといふ事で御座る。

○ナンと各々方世には斯ういふ珍らしい恐ろしい事もあればあるもので御座る。彼の醫者どのが智者であつたればこそ、兩方に怪我が無くて治まつたのである。

以上の語して能く考へて見られたが、宜い善い事は嘘でも極樂は本眞となる、又悪い事は嘘にしても結果は地獄となる。敢て嫁姑ばかりの事ではない、縦令向ふから何の様な無理非道を持ちかけても、高が三十日の氣になりて向ふの望みの通りにしてさへやれば、三十日かゝらぬ内に首尾よく相濟むものぢや、夫れを勤めても見ずに何うの斯うのと小言ばかりを云うて、暇にあかして苦しむは無感覺もなき事

ぢや
又何の様にしても仲の直らぬのは矢張我が腹の中の鬼の業ぢやと明らかめたが宜
い彼の嫌の如く善き事は虚にして極樂は本真となる其代り悪い事は虚にして
も地獄は本真となる私は虚に盗んだのて心には更に盗みをする氣ではなかつた
のて御座ると何の様に言ひわけをしても罪は決して遁れるものでは御座らぬ地
獄も極樂も鬼も佛も此の出入息と入る息との分目に極まるのであるから早く本
心に立歸るが何よりの肝要て御座る

授戒説教終

受戒の功德

高田道見述

第一 受戒の必要

◎戒弟』先づ懇懃鄭重に三拜し終つて問ひを設く——エ、私は此度お勸めに
與りまして入戒させて戴きました者て御座りますが實は今回が初めてなので未
だ一向にお授戒の様子も存じないのであります。兎に角有難いものぢやげな
といふ位の事でツイ付く氣になつたので受戒すればどの様な功德のあるもの
かどの様な必要があつて付かねばならぬものかと分らないのであります
まあ七日経て見れば追々様子も分りお説教も聞かせて戴かるゝのではありま
せうが——斯様に申すはエロー恐入る次第ではありますけれど前以て心得の
ため受戒の必要といふことをお聞き申して置けば一層有難いかと思ひます。今
日は初日の事でまだ何がドウやら磁石なしに大海へ乗出した様なものでチッ

トも其の方針が分りませぬのです甚だち邪魔さまではありませうが別に一座の御講説を拜聴させて下さいまし

◎戒師『ウン左様かそれはまあ御奇特なことよくまあ付く氣になられました、まあ何より結構な事御座る初めから理由は判らんでも不圖授戒へ付く氣に成られたのが宿善開發の時節が到來したといふものぢやドウしても宿善のない人は唯がどの様に勧めたからとて、勿々付く氣に成れるものではなけれど、勧めに因て不圖其氣に成られたのは真如内薫の力と申して、前生に善き種蒔をして置かれたからの事である

◎戒弟『イヤ有難う存じます、實に仰せの通り私も初ての事なれば切めて兩三人なりとも同伴を拵へてと思ひまして、夫々心當りの人々へ話しをして見ましたけれど、テんで受付ませぬから止むなく一人て參つた様な次第であります◎戒師『サア其處ぢや生木にはドの様様に火を焼き付け様としても燃付くものではない品物でも爾うぢやないか、テんで買ふ氣のない人には、ドの様様に勧めても首から刎付られて了ふであらうが、然るに樹木でも燃付く性を具へたものは、外から

一寸火を點けさへすれば直に燃付くものぢや品物でも爾うぢや幾分か買氣のある人に行當ればツイ買はれる様なもので宿善のない人は、マルて生木を見た様なもの、又品物にチツトも必要を感ぜぬ人を見た様なもので、それを佛法では無性闍提の人と唱へるのである

◎戒弟『ア、左様で御座りまするか、その無性闍提とはドウいふ事柄で御座りませうぞ

◎戒師『ウン佛法の言葉は御承知があるまい、無性とは無佛性として佛の因が無いといふこと、闍提とは梵語として天竺の言葉で御座る、コレは信不具といふことで、テんでに信心の無い人といふことぢや佛の因佛の因とは信の一字である、信の一字、信とはマコトと訓む、マコトの心が信心ぢや、信は信用の信、マコトにして偽りなき心ぢや、マコトにして偽りなき心、この心は仁義禮智信の五常、その五常の要となつてをる、信の要があるから、仁義禮智の四ツがマコトの活用をするのである、若し心の中に信の一字がなければ、仁義禮智も頼みなきものとなる、信は一身の要、一家の要、一國の要である、要とは即ち主宰の義である、主はアルジ、宰はツカサ、主

四
があり宰があるから物の取締ができてくるのである、一身に信の主宰がなければ亂れて来る、一家に信がなければ家が亂れて来る、一國に信がなければ國政が亂れて来る、一國の主宰は國王である國王は一國の要である故にマコトの要が動かねば國力が強大である併し此れは且く世教に於て説く所のマコト即ち信の一字であるが佛法で説く所の信は是れよりも意味が深いのである謂ゆる信不具の信は佛法で談ずる所の信である世法で談ずる所の信こそは大抵の人が具へてをる若し其信がなければ人間として世に立つことが出来ぬからである士農工商各々其信があるから人並の交際が出来てをるのである夫れでも往々其の信が崩れて偽りを働くものぢやに依て世人の信用を失ふものが多くある

第二 佛法の信心

●戒弟● 然らば佛法の信はどの様に心得て宜しいのでせうか

●戒師● 佛法でもマコトはマコトに相違ないけれど只嘘を言はない偽りを爲さない世を正直に渡るといふ位なことではない信は不疑を以て義と爲すともあり

澄淨を以て義と爲すともあり決定を以て義と爲すともある不疑を以て義と爲すともあるから疑ひの無き心が即ち信心である疑は愚痴の煩惱である疑心暗鬼を生ずると申して疑ひの眼鏡を掛けて見れば茄子を踏んだのでも蛙であつたかと疑ひ繩の切端を見ても蛇ではないかと疑ひ木頭を見ても妖怪ではないかと疑ひ他人の眞實語を聞いても妄語ではないかと疑ひ如來の正法を聞いても邪法ではないかと疑ふ之を疑心とも疑念ともいふ譬へば青天に黒雲の鎖した様なものであるこの疑雲に捲かるゝものであるから日月の様な明かな心も眞黒闇になつて眞理を照し見る事が出来ぬ

然るに此の疑雲を一掃すれば心地が明かになる前に申した澄淨とは濁水が澄んで淨かになること水が淨かになれば中によく影が映る心月が圓かになれば眞理がソックリ其儘に信じられる心水が清くなれば聖人の教が心内の水鏡に映つて来るから信ずる氣になるのである已に胸中に曇りがなく心水に濁りが無ければ如來様の説かせられた教法が直々其儘一點の疑ひなく信じられて来るそれを決定の義と申したのである教法が信じらるれば如來様が有難くなる又如來様の教

法を弘めさせらるゝ菩薩方や祖師様方も有難くなる。又如來様の御紹介下された諸佛諸菩薩諸天神も何となく有難くなるのである。今貴殿が勧めに依て授戒へ付く氣になられたのは何故であらうぞ。自身で自身の信念が分らぬであらうが其れが夫れ宿生の善根といふものぢや、真如内薫の力といふものぢや、宿生とは前生のこと、内薫とは薫習力のこと、即ち貴殿が前世に於て佛法僧の三寶に歸依せられ、深く善根を修行せられた信仰の力が煙の柱に薫り附くが如く、沈香や麝香の匂ひが衣服や香函に染み着いてをるが如く能く其の心内に薫習してをればこそ、誰れ教ふともなく、獨り手に善心の兆すのもあり、誘引られて不圖善事に心の浮ぶこともある、誘引られても却々其氣に成られぬのは業障が強くて宿善の力が弱いからである……爾うして見ると授戒の何物たるかが分らんでもハア、授戒か、授戒は有難いものぢや、げな世間に多くの人が我も〜とお授戒に付かれる、どんなものかは知らねど、自分も一度は授戒に付いて見たいものぢやと思はれた其の心……其れが即ち一念の信である、佛法の謂ゆる信心である、ドの様にして生誕に此心の起らぬ人がある、夫れ是を無

性闡提とは申すので御座る、去り乍ら説令授戒に付かずとも佛法を信じて、佛菩薩を禮拜し、佛法を聴聞し、佛法の儀式に依りて葬祭でも營む人は、無性闡提とは申されませぬ……世に佛とも法とも知らぬ惡人凡夫がある、佛法とだに聞けば何となく忌味心の起りて、頻りに之を攻撃し、誹謗する人がある、其等が即ち無性闡提である、外道邪見の人である

第三 宿生の善根

●戒弟……エ、只今段々御講説になりました善根と……真如、それはどの様な事でありませうぞ、善い事の様には幾ばれますけれど、今少しハッキリと噛み砕いてお聞かせを願ひたいものであります

●戒師……成る程、初めてぢやから分り兼ねるも御尤ぢや、善根には凡そ三種がある、無貪と無瞋と無癡と之を三善根といふ、

▲無貪……とは貪欲の無き心ぢや、凡そ情識あるものにして欲の無いものはなけれど、分に過ぎた欲を貪欲といふ、貪はムサボルと訓む、私欲を恣にするのが貪

欲である、その私慾なきを無貪とは申したものの
 ▲無瞋……とは瞋り腹立つ心の無きこと即ち堪忍の強き人の事ぢや
 ▲無癡……とは愚癡の心無きこと愚癡とは道理を辨へぬオロカな心である、オロカな心から道理に外れたことを思ひ、真理に合はぬことを考へ出して悪事を目論むのである、この愚癡を轉じて能く真理を明らめ道理に順ずるのが無癡である

一切の悪事はこの貪瞋癡が本となり一切の善事はこの三無心が根となるから、之を三善根と申すのである、貪瞋癡の三心は人の心を味まし身をも害するから之を毒に譬へて三毒と申すのである、この三毒心の虛妄分別といふ、虛妄分別心の無きを眞實眞如の心といふ實際に是心を得た人を佛如來と申すのである、故に一休禪師の歌にも △食欲と瞋恚と愚癡と人の身に離れて見れば釋迦と同然——とある、ナカノノ之を離れるのは容易でなければ、假にも之を薄くする様な方便を廻らすのは、即ち善根を植るといふものである、我が高祖道元禪師の御歌にも △愚痴なる心一つの行末を、六つの道とや人の踐むらん——と仰せられてある、六

つの道とは地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六道である、六道は苦みの辻迷ひの巷と申すので、此中に經廻り迷ふのが、凡夫といふもの、衆生といふもの、此中に在りながら、自由解脱の境界に遊ぶのが、即ち聖人賢者である
 同じ夫れ眼は横鼻は堅なる人間に在りながら、生れながらの善人があり、生れながらの悪人があるのは、宿善を有ら來つたのと宿惡を帯び來つたとの違ひである
 今この戒會に付かれた方々は、残らず善男善女にして宿善の最も強き人々と云はねばならぬ、信根の深き人々と云はねばならぬ、又々拙僧に因縁の厚き僧俗男女である

第四 善根の培増

●戒弟——爾うして見ますと私共は善根の上に善根を積み、功德の上に功德を累ぬる様なものでありませうか

●戒師——爾うですとも、我が高祖大師も善根山上には一塵も積むべく功德海中には一滴も漏らすこと莫れと示しになりましたから、善事と氣が付いたならば

成る可く通さぬ様に成さるがよし、功德に成ると思つたならば願うても作す可き
てあります、お授戒も爾うぢや、一度よりも二度、二度よりも三度と、度数を重ねた方
が宜しいのぢや、その功德善根は信の一字より生ずるのである、信と申す中にも迷
信もあれば妄信もあり、解信といふもあれば仰信といふもあれど、今謂ふ所の信は
即ち佛法の正信である

第五 佛法の正信

●戒弟「……サア其の正信といふはどの様な心でありませうか

●戒師「夫れは追々にお話しもするのであらうが、一番早分りに申すと、佛法は
有難いものぢやといふ希有の心と、佛法は勿體ないものぢやといふ尊重の心と、佛
法は結構なものぢやに依て何うぞ聞きたいものぢや、見たいものぢやといふ願求
の心此の三心……之が信の意義である此の三心即ち

有り難い……希有の心
勿體無い……尊重の心

求め度い……願求の心

之を一ツにすると戀慕渴仰の心である、戀慕……とは戀ひ慕ふ心ぢや、渴仰……
とは威極つて愛情の溢るゝ事ぢや、世上の戀歌に

思ひ出すよぢや戀れよが薄い

思ひ出さずに忘れずに

といふ如く、身をも心も佛法の大海に投げ入れて全く二心なく、日々夜々、念々、從心
起念々、不離心といふ様に一心不乱になり切て了ふのが正信の得られた相である

○高祖大師のお示しにも

オホヨソ諸佛ノ境界ハ不可思議ナリ、心識ノオヨブベキニアラズ、イハンヤ不信
劣智ノ知ルコトアランヤ、タゞ正信ノ大機ノミ、ヨク入ルコトヲ得ルナリ、不信ノ
人ハタトヒ教フトモ受クベキコト難シ、オホヨソ心ニ正信オコラバ修行シ參學
スベシ、然カアラズハ且ク停ムベシ、ムカシヨリ法ノウルホヒナキコトヲウラマ
ヨ

と仰せられました、が誠に有難い御教訓では、御座らぬか正信の大機と仰せられた

のは佛法を戀ひ慕ふ人々のことである法の潤ひとは前に申した宿植善根眞如内
 薰の力である如何に世智に長けたからとて富貴高名であるからとて正信の起ら
 ん人は不信劣智の人と云はねばならぬ如何に辯才無碍であるからとて學古今を
 究めたからとて佛法僧の三寶に歸依し得られぬ程の人々は、お氣の毒ながら衆苦
 を解脱して安身立命の域に遊ぶことは出来ませぬソコで聖徳太子の憲法にも
 篤ク三寶ヲ敬ヘ三寶トハ佛法僧ナリ四生ノ終歸萬國ノ極宗ナリ何レノ世何レ
 ノ人カ之ニ歸セザラン三寶ニ歸セズンハ何ヲ以テカ其ノ狂レルヲ直ウセン
 と仰せられましたが宿善のなき人は此の三寶に歸依せずして惡事を惡事とも思
 はず多くは曲つたことばかりを働いて居るでは御座らぬか然るに貴殿および戒
 弟の方々は篤く三寶を敬うてお授戒に付き悉くも三寶歸依の身となり佛戒受持
 の戒弟とまでなられたのは實に千生萬劫難値難遇の一大事因縁なりと喜ばねば
 なりませぬ
 已に戒弟の數に入られたからには、一七日の間説く所も行ふ所も皆戒會の作法に
 順じて信受せられなくてはなりませぬ、一々信受せらるゝ覺悟の人ばかりである

から何れも残らず正信の大機のみと云はねばならぬ高祖大師の示しにも
 正信ノ助クルトコロ惑ヒヲ離ル、路アリ智ニ依ラズ文ニ依ラズ言ヲ待タズ語
 ヲ待タズ
 と仰せられました然れば設令一不文知の尼入道たりとも、あゝ有難い事ぢや勿體
 ない事ぢや、お説教も有難い、お經を聞くのも有難い、其上血脈の戴かれるのは猶
 更有難い事ぢやと願求せられてある其心が即ち佛法の正信である華嚴經には信
 は道の源功徳の母なりとあるから、一切の善根淨法は信の一字より流れ出て、一切
 の功徳善根は信の一念より生れるのである、又大智度論に信は手の如しともある
 により今は正しく佛戒を信受することが出来るので御座るが其前に悔懺といふ
 ことを爲なければならぬ

第六 懺悔の心得

◎戒弟』エ、其の懺悔とは何ういふ意義になるのでありますか
 ◎戒師』……懺といふは懺摩といふ天竺の語懺といふは悔過といふ支那の語で

あるその梵語と漢語とを一ツに纏めて懺悔と申すので早分りにいへば後悔する事であるあゝ悪るかつたと自分と自分に罪過を悔める事ぢや懺悔とはモウ是れから後は誓つて罪を犯さぬと決定しスツかりと心地を掃除し六根眼耳鼻舌身意を清める事ぢや何を掃ひ何を清めるのであるか過去遠々劫より染りに染りし貪瞋癡の三毒を掃ひ清めるのである神道に大穢といふことのあるは十二月に年中の煤垢を掃ひ清めるが如く六根の塵垢不浄を大穢に掃ひ除くの意である佛法の至心懺悔と同じ事である譬へばこの凡夫の身心は久しく毒蜜を盛つてあつた陶器を見た様なもの今之を用ひて甘露の如き蜂蜜を盛るには以前の毒蜜をスツかりと除き尚ほ灰を以て磨き湯を以て洗ひ水を以て清めねばならぬ様なものである乃ち佛戒の甘露を受けて盛らんとするには何うしても身語意より造りし罪業の毒蜜を懺悔して身心の器を清浄に爲なくてはならぬ必要がある然れば説教の度毎に

我昔所造諸惡業 皆由無始貪瞋癡 從身口意之所生 一切我今皆懺悔
といへる懺悔の文を唱へたり三千佛名を唱へ南無三世諸佛と唱へツ、禮拜を行

するのは懺悔の方法である又五日目の晩には別して懺悔の儀式を行ひます其邊の事は時々直増和尚から御指南申す事であらう

第七 正傳の大戒

◎戒弟——我れくの様な素凡夫が佛戒を受くることの出来るは實に希有の大因縁で御座りまするがその有難い佛戒と申すは下の様なもので御座りませうぞ

◎戒師——此れは説戒として毎日是れから講説に及ぶのであるから今委しいことを説明する必要もないが折角の問ひであるから茲に一言申べて置ませう抑々本宗に正傳する所の佛戒といふは三歸三聚十重の十六條戒である▲三歸とは佛法僧の三寶に歸依し奉つること乃ち南無歸依佛南無歸依法南無歸依僧と申すのである▲次に三聚淨戒とは第一攝律儀戒第二攝善法戒第三攝衆生戒と申すのである

第一は諸惡莫作として一切の惡事をは露塵ほども造らじと誓ふのぢや

第二は、衆善奉行として一切の善事をば海山ほとも行はんと誓ふのちや
 第三は、自淨其意として慈悲心を運ばし一切衆生を助けんと誓ふのちや
 次に十重禁戒とは第一不殺生第二不偷盜第三不邪淫第四不妄語第五不酤酒第六
 不説過第七不自讃毀他第八不慳法財第九不瞋恚第十不謗三寶の十戒である
 以上の十六條戒——之を金剛の寶戒といひ、先佛の大戒ともいふ、釋迦牟尼佛より
 之を迦葉尊者に授けられ、迦葉より阿難乃至二十八世の達磨大師に傳へられ、乃至
 五十一世の道元禪師に傳へられ、嫡々相承して今日の拙僧に至り、拙僧が親から貴
 殿及び今度の諸戒弟にお授け申すのである、而して六日目の晩には戒弟衆を現ら
 ず須彌壇上に登せて

衆生佛戒を受ければ

即ち諸佛の位に入る

位大覺に同うし已る

眞に是れ諸佛の子なり

といへるも經の文句を唱へつゝ、須彌の下に在りて須彌を三匝するのである之を

登壇と申すのちや、まあ委しい事は直壇から指圖をする

第八 入諸佛の位

●戒弟 我々の様な素凡夫が直に諸佛の位に入るとは、餘り勿轉なさ過ぎて何
 うであらうかといへる疑ひが起りさうに思はれますが

●戒師「サア夫れは佛位に二種あることを御存じが無いからの事ちや、佛位の二
 種とは因佛と果佛とである、因佛とは因位の佛ちや、果佛とは果上の佛ちや

因位の佛とは菩薩の事である

果上の佛とは諸佛の事である

因位の信位を發心滿位といふ

果上の人位を行果滿位といふ

菩薩の信位に住するを法成佛といひ菩薩の妙覺位に入るを人成佛といふ菩薩の
 位には五十一位ある、五十一位とは十信十住十行十廻向十地等覺是れて五十一位
 ちや、十信を外凡の位といひ、十行向の三賢位を内凡の位といひ、十地を聖位とし、等

覺を金剛位とも金剛心とも金剛位定ともいふ
 而して十信とは信位を十種に區別して其の深淺を示したものである、されば此の
 十信の初心に入り、初めて因果を信じ、三寶を信じ、眞如佛性あることを信すれば、善
 薩の位に入るのである、されど此の善薩の心は輕きこと、空中の毛の如しとある
 今貴殿方の起された信仰は輕毛の如きもので、實は危いものぢや、少しも無明の
 風に吹かれるれば、何れへか飛び去つて了ふかも知れぬ、されど第六の不退心に入れ
 ば上品の位であるから、滅多に後戻りは爲ないであらう、更に進んで第九の戒心第十
 の願心といへる滿信に至れば、則ち信成就といふことになる、信成就に至りても尙
 ほ信力の根が強大でないから、殊に依ると退失することがあり、易いに依り、之を不
 定聚の衆生と申してある、五戒や十善を行する人々は、此中に攝めて宜いのである
 然るに、今慳く懺悔を修し、善薩の大戒を受けて、金剛堅固の信心を決定する人は、更
 に一步を進めて十住の初住なる初發心住に入り、モウ何うあつても退失の恐れな
 きことを得るが故に、眞に是れ諸佛の子なりと仰せられたのである、初發心住――
 之を不退位とも正定聚とも申すのである、ソコで梵網戒經に

金剛の寶戒は是れ一切佛の本原
 一切善薩の本原佛性の種子なりとある、金剛の寶戒とは決定信心の佛戒である、信
 心が決定して不退轉なれば、必定して佛に成れるに極つたのである、故に決定の一
 念信が正因佛性の種蒔といふもの、馬鳴大士も確かに如來種の中に入ると仰せら
 れた、何と有難い事では御座らぬか

第九 信後の用心

●戒弟』されば我等一念の信心は螢火か星光位なものでせうか
 ●戒師』如何にも佛果位は太陽の如く、滿月の如きもので御座る故に、受戒入位ぢ
 やと申したからとて、諸佛と肩を齊うすることは夢にだも出来ませぬ、只ホンの仲
 間入をさせて戴いた位のもので、佛種子の植付が出来たのであるから、未來は必ず
 佛果を得らるゝ譯ぢや、されど春の田に米の種を卸した様なもの、秋を待て米穀
 を澤山に收め様とするには、勤めて田の艸を取り、水を引き、肥料を充分に加へて養
 はなければ得られぬと同じこととて、堅心にこの佛戒を護持して、惡欲不善の艸除を

し解脱禪定の水を引き、智慧觀察の肥料を充分に加へて修行しなければ、菩提涅槃の佛果を成就することは出来ませぬ。即ち發願利生、行持報恩といふは、全く信後の相續で御座る佛位に入りて佛に成り、血脈の戒體を戴いて菩薩になつたから、モウ油断しても放任しても大丈夫ぢやと下手に安心せられますと、折角誇いた佛の種因が腐敗して了ふかも知れませぬから、入位後の用心が肝要。

第十 受戒入位の事

我宗に於ては古來たゞ小乗の二百五十戒に據んで大乘の十六條戒及び四十八經戒を授受し之を受けたるものを佛子菩薩子戒弟と稱するのみにて未だ曾て菩薩の階級を論じた先輩はありませぬ。唯り面山禪師が大戒訣の中に受戒の戒弟は發心満位にして信想の菩薩に當るのぢやと申されました。然るに従來梵網經に於ける衆生受佛戒即入諸佛位同大覺已、眞是諸佛子——とある文句を唱へて登壇せしめたる戒弟を三匝するの習はせとなり、又修證義の中にも受戒入位の綱目を掲げ、其中に此文を引證してあるより、入諸佛位とあるを餘りに分外ではないかと疑

念を懐く者があるから其の分外でなきことを知らしむるが爲め別教菩薩の階級に準じ、その分限を明にしたのであります。

第十一 入正定聚の事

已に菩薩戒といへば大乘の學人經文の中に階級が明してあるから、初心の菩薩かといへる問題が獨り手に持ち上つて來る中に内外凡の菩薩もあれば賢聖の菩薩もあるにより、素凡夫が菩薩の仲間入をさせて貰ふた其の分限を調査して見なくてはならぬ必要がある。古來我宗に於ては三聚の衆生など名目だに知らぬ人があるにも拘らず、受戒入位は入正定聚の位であるぞと指定せしに就ては、異論があるかは知らねど、我宗の懺悔受戒は起信論に謂ゆる信成就發心に該當するものと信ずるから斯くは論決したのであります。

第十二 信成就發心

此れは不定聚なる信心未決十信の善男善女が懺悔受戒の加行に依りあゝ有難い

事ぢやといへる一念の信心決定に依て、順に十信の満心より十住不退の初發心住に入るから戒弟の分限を定むるに、信成就發心の菩薩であると論じたのである。併し中には此の勝縁に逢へるも善根微少にして、十信位の下品に留まる人々も多くあるてありませう。華嚴經の中に初發心時便成正覺とあるは、全く十住の初心である。と信じます。之を因中説果と申して、初發心の因中に成正覺の果上を説くのである。譬へば總領の誕生せし時、未來の主人が已に出來たといふ様なもの、王子の誕生を祝して未來の國王が出來たといひ、春時の種蒔を以て秋時の收穫を豫想すると同じ様なものである。線香の火も、太陽の火も、火の性に變つたことは無けれど、火力に大小の別あることを知るべきぢや

第十三 金剛の寶戒

天照太神も大空玄虎禪師から金剛の寶戒を受けられたと申すのであるが、ドンなものか、金剛の寶戒なのであるのかと疑ひを抱いてをる人もあらうが、菩薩の十六條戒が直に金剛の寶戒ぢや、金剛は堅固不壞の徳を具してある寶の名である。○本

業瓔珞經に菩薩戒は受法有りて捨法無し、犯有れども失はず未來際を盡すとある。是が即ち金剛不壞の義である。やれ有難や勿躰なやといへる眞實眞如の一念信が發起すれば、直に得戒である。心華開發の時節である。金剛不壞の寶戒を受けたといふことにもなる。金剛の寶戒は是れ諸佛の本原行菩薩道の本原佛性の種子ぢやとある。又之を受け已りしものを眞に是れ諸佛の子なりと仰せられてある。種子佛子の文字に着眼して、解毒圓吞の誤解なきやうに願ひたい

第十四 南無三世諸佛

南無は梵語であるから、翻譯とも書いてある。故にナムともナウホともナウマクともノモともいふ。皆梵音の訛りである。翻譯して歸命とも歸依とも歸投度我救我ともいふ。或は之を請求の一念とも申して頼み縫るの一念ぢや、身も心も諸佛の方に打込みて任せ申して、全く自己を忘却して了ふのぢや、自己を忘却するとは己れを忘れて了ふのである。己れがくといへる我見をスツカリと浪じた時が諸佛と同體になつたのである。三世とは過去現在未來である。モット委しくいへば三世十方

一切諸佛と唱ふべきである。三世は豎の時間十方は横の空間である。諸佛とは圓滿報身の盧舍那佛である。一佛か多佛か、多佛か一佛か、一多の邊際を問ふには及ばぬ。只一心不亂に稱名禮拜すれば功徳無量である。

皇太神の受戒

高田道見述

第一 太神受戒の寺

諸君拙稿は本年明治三十九年五月東都の法輪社より伊豫の自坊へ行く便宜を利
用して伊勢太廟へ參拜致しました。これは戰勝國民として御禮參りの心持であり
ました。が其實は「皇太神受戒」の眞偽を解決せんが爲めでありました。それは今更事新
しく斯様な問題を擔ぎ出す必要もありませぬけれど、世の智識が進歩するに連れ
て懷疑の念も亦一步を進め、古來我宗に於て勸戒の第一要素として居た皇太神御
受戒の因縁なども、野蠻時代の神話と同様に輕視せられて其實を失ふやうな時勢
になりました。夫れでは甚だ遺憾の事ぢやと思ひ、受戒入位を以て本宗の安心と定
められ、一萬四千の寺院二萬有餘の僧侶幾百千の檀信が生命とせる受戒の貴き例
證をして行末永く事實として尊重せられんことを思ふが爲め、越々勢州一志郡阿

坂村曹洞宗浄眼寺へ足を運び太神受戒の始末及び今に現存せりといふ神明授與の寶物を拜觀いたしたのであります。拙稿が彼寺へ到着したのが丁度同月の廿日でありました。寺は一等法地二十二級現今の住職は大辻津梁師檀徒は二百ばかり得米は四十石山林は三十五町開山は大空玄虎禪師伽藍も開山當時のやうてはなけれどまあ可なり小幡んまりした寺である。此寺は參宮鐵道に乗つて行くと、勢州一身田と松阪との中間に六軒といへる停車場がある。其處で下車すると夫れから三十丁ばかりの所にあります。此寺に參つたのはナカ／＼一朝夕の思立てはありませぬ。二十餘年來熱心に思うて居たのでした。が今ぞといふ因縁が熟しなかつたものですから、ツイ／＼思ひ乍らも宿志を果すことが出来なかつたのですが今年はいよ／＼其機が熟して參拜し概略事の始終を調査致しましたから幸ひ本誌(法輪)を以て御報道に及びます。

第二 開山大空禪師

本宗の開祖永平道元禪師の御言葉に「イマコノ佛祖正傳ノ門下ニハ、ミナ得道證契

ノ哲匠ヲウヤマヒテ佛法ヲ住持セシム、カルガユエニ冥陽ノ神道モキタリ歸依シ、證果ノ羅漢モキタリ問法スルニ、オノ心地ヲ開明スル手ヲサツケズトイフコトナシ、餘門ニイマダ開カザルトコロナリ」と仰せられた如く、道得證契の人は冥陽の神道も來り歸依すとある。冥はクライといふ字であるから鬼道のこと、陽はアカルイといふ字であるから神道のこと、悪人の死んだのが鬼道に墜ち、善人の死んだのが神道に遊ぶとある。凡僧にはナカ／＼冥陽の神道が歸依せぬけれど、聖僧には必ず歸依した例證が支那にも日本にもある事。怪むことはないのである。支那の破産墮和尚が鬼神の爲めに説法し神が形を現はして拜を設けたのも有名な話し、又嵩嶽の元圭禪師が嶽神の爲めに佛戒を授けられたといふことも隠れなき話してある。又本邦の天満宮が支那徑山の無準禪師に佛戒を受けられ住吉明神が長州太宰寺の定庵和尚に佛戒を受けられ豊前の香良明神が傳教大師に就て佛戒を受けられ宇佐八満宮が弘法大師に戒法を受けられ越中の立山權現が同國立川寺の大徹禪師より戒法を受けられ、越前國廿日市洞雲寺開山金剛禪師より佛戒を受けられ、加賀の白山權現が大乗寺の徹通禪師より戒法を受けられ、丹

波の白蛇明神が同國永澤寺開山通幻禪師に就て心地戒を受けられたといふことは佛教の歴史に明るき人の共に疑はぬ所となつてをのみならずその現證も今日まで歴々としてあるのですから獨り皇太神の受戒を疑ふには及びませぬ而してその皇太神に大戒を授けたまひしといふ大空禪師はソモ如何なる人であらうか若し此人が凡人であつたとしたならば虚構の事であるかも知れませぬけれど得道證契の哲匠であつたとしたならば太神も必ず歸依受戒せられたに相違はありませぬ

何故かといふに太神とて別な人ではない御承知の通り我々日本人の御祖先にましますのちや即ち頗る大善人の死したまひし神靈にましますので菩薩羅漢の如きとはその御境界が別てあります故に佛戒をお受けになれば神徳益々昭々として神威を増進するからの事であります諸神の受戒は何れも同一轍である然らばまづ其の戒師となりたまひし大空禪師の行狀よりお話し申さないと諸君に篤と御承知が行かないであらうと存じます

第三 禪師の御誕生

昔しの習慣としては今日の如く戸籍名簿の調査が嚴密でなかつたから澤山の高僧傳を繕いて見ても精しく書いたものは皆無の有様ですが大空禪師も矢張その通りで精しいことは分りませぬ或は武州の人といひ或は勢州の人ともある一説には勢州松坂の郷に大きな松の老木があつたその松の枝に鷹の巢があつた其中に赤子の啼聲がするやうであるから或人が覗いて見たれば果して玉の様な男児が愛らしい顔をしてをるソコて其人が之を拾ひ揚げて育てましたが父母の分らぬ子なればとて五六歳まで養育してから寺へ小僧に遣つたとあります其寺とはハツキリ分りませぬけれど我が曹洞宗では無かつた様子です御年七十八歳永正二年にて遷化せられたとあるより打算して見ますと人皇百二代稱光天皇正長元年戊申の御誕生かと思はれます武州北多摩郡久留米村曹洞宗淨牧院は禪師の曾て住山なされた寺でありますが此寺の傳記には觀音の御化身にましますから父母や氏姓が分らんのだちやと申してありますけれど夫れは餘りに尊崇し過ぎた

想像ではないかと思ひます、如何に非凡の聖僧ぢやからとて肉軀のあるからには、父母の胎を借りて生れになつたに相違はありませぬ、これは何れ姓名を憚る人の棄子であつたのであらうと思ひます、イヤ斯ういふ方に却て偉人はあるものてす

第四 玄虎藏司の稱

實は大空禪師といふよりも玄虎藏司といふ方の名稱が世間に高まつてをるのであります、その謂れを尋ねて見ますに元來夫れ天性鋭敏の質でありますゆゑ、教宗の寺に居ることを厭ひ活潑なる禪僧に參じて見たいといふ觀念が浮んだものですから、その師僧より暇を取り天下禪門の知識に就て悟りの道を稽古せらるゝ事となり、諸方の叢林に行脚せられて禪學も大いに進んで參りました時に遠州の石雲院に宗芝性悟禪師といへる善知識の居られるといふことを聞き込み是非その禪師に教を受けたいと思ひ尋ねて其寺に行かれました、さて其の行かれる前夜性悟禪師が大きな虎が坐禪堂の中へ躍り込んだといふ

夢を見られたさうです、ソコで早朝禪師は衆僧に向つての仰せに近々のうち度恵來雲水が来るかも知れんぞと告げられたさうですが、其日の午後果して此の玄虎和尚がやつて來られたとあります

その行かれた時の問答も記してありますけれど、それは諸君にお分りかぬるから且くお預りに致して置きます、成るほど其の態度が他の衆僧に異つて居るものてすから、禪師もおのづから特別の取扱ひをして居られました、やがて藏司の役を申付られました、その藏司とは一切經の納めてある藏や又は圖書室の鑰を主る所の役向であります、而もそれが二十年の間ぢやとある、其の間度々その考ふる所を述べて許しを求められたけれど、いつも叱り付けてナカク、許されなかつたとあります、さて大器は晩成とやら二十年の非常なる御苦辛にて遂に大悟大徹の境界に進まれ、その機鋒や當るべからずといふ様になつて來たものですから、玄虎藏司の名は赫々として天下叢林の間に傳へらるゝ様になつたのであります、何時までも藏司の役ではなく、後には石雲院の住職ともなられ、諸寺の開山又は住持にも職請せられたのであります、けれど、そがツイ呼聲となつて御生涯の間は無輪後の世

までも伊勢の玄虎藏司といふことになりました又後に皇太神宮の受戒せられたといふ因縁が高僧傳に刻まれましたから皇太神は淨眼寺の玄虎藏司より佛戒を授かりになつたといふことが廣く天下に知れ渡つたのであります

第五 地獄谷の退治

斯くて禪師は性俗和尚の後席に直り遠州の石雪院に御住職中御年四十五歳の時文明四年の事でありましたが勢州阿阪の山中に地獄谷といふがあつて猛火は烟々として天を焦し罪人叫喚の聲は近傍に聞えてその邊りに近寄る者が無いこの事を聞かれ申さるゝに夫れは何うも怪しからぬ事ぢや皇太神の在しますその近傍に左様なことのあるとは聞き捨てにならぬ話しぢやそれは是非退治して仕舞はねば皇國の耻辱であるぞとて一錫飄然遠州を立ち出て直に勢州へ向はれまし

第六 皇太神の託宣

夫れから先づ一直線に玄虎禪師は皇太神宮へ參詣なされて一夜静かに神前に坐禪せられました聽て東も白らんでほのくくと明るくなりかけましたから辭して退かんとせられました所が髣髴として神語のあるを聞かれまするに是れより成亥の方角に當り妖邪の氣があつて人民を煩はすにより汝の定力によつて之を退治するに於ては遂に永く正法興隆の地となるであらう左すれば吾も亦その正法を護るであらうぞとの御告げ禪師は威胸に迫りて退かれ徑ちに阿坂山の窮谷に到り御覽になれば如何にも聞かれた通りの次第であります

第七 窮谷に坐禪す

ソコで禪師は地獄の側近き所にまで進み石上に七日の間少しも動かず坐禪して居られました成るほど山も鳴り谷も響いて修羅闘ひの音も聞え罪人責苦の聲も聞えます不思議な現象であります是ぞ謂ゆる經文の中に閻浮提の處々に地獄あり或は山林曠野の中に在りとあるのは偽りの無きこととありますこの地獄を孤獨地獄と名けてありますこれは勢州に限らず越中の立山信州の淺間山九州の

阿蘇山加賀の白山南部の恐山なども皆孤獨地獄の種類と云はねばならぬ昔しは野州の那須にも濃州の今須にも駿州の富士にも孤獨地獄があらはれたとある時に玄虎禪師は竊かに法語を唱へ天地も爲めに震動するほどの音聲を揚げて大喝一聲せられたスルと不思議なる哉其れまで驚くやと騒がしかつた地獄の現象がバタツト消散して了ふたとある諸君實に不思議な事ではありませぬか尤も今須の妙應婆を載せて牽いた火車も大徹禪師が如薪盡火滅と云つて彈指三下せられたればその火がポツト消えたとある法力といふものは實に不思議でありませぬ夫れから其處に山居せられた様にもあれど願望が成就したものですから再び東に歸り武州の淨牧院に五年ばかり住職なされたかと思はれます

第八 淨眼寺の開創

さて地獄退治のことが追々國人の大評判となつたものですから時の國司多氣御所の大納言北畠材親卿が殊の外師の道風を慕はれそれは何うも尋常の人でない必ず非凡の高僧であるから是非その地獄谷であつた所へ寺を建てさうして御

請待申さなければならぬと非常なる熱心を以て幾度か人を使はして請待せられましたソコで辭するに辭せられぬものですから爾ういふ次第なれば何も因縁ぢやに依て參らうといふことになり淨牧院を辭して勢州の新寺へ移轉せらるゝ事になりましたのが文明十年でありますから地獄退治の年から七年目になる勘定です故に一年餘りは地獄谷に庵を結て山居せられたかと思はれます其時に述作せられた山居の偈もありますそれが六ヶ敷いから預りに致します
さて玄虎禪師がその新寺へ入り込になつたものですから十方の歸依は申すまでもなく大納言は常に出入して參禪閉法せられ多くの寺領を寄附し多くの金物を資けて大叢林となし幾百人の衆僧を養はるゝやうにせられ御自身に於かれては終に入道して法鉢となり僧名を無外逸方と稱するまでになられたのも全く開山の道力によるのであります當時は寺收も四百石からあつたと申すことである

第九 皇太神の入室

さて夫れから兩三年も経て成夜の事です開山大空玄虎禪師方丈に坐禪してをら

れました禪師は行ひの高い方て夜とても床を取てお休みになるといふ譯ではなく御法衣を着けられた儘静かに坐睡して居られましたスルと十二時頃乗僧も寝鎮まつて物音も致しませぬ時に何ういふものか清風がソヨ／＼と吹き来り何となく室中が明るくなりましたハテ妙ぢやなと奇異の感に打たれてお在りなされるると須臾にして峨冠偉服の異人が手に圭を執り珊然として禪師の面前に参られました時に禪師聲を掛け貴下は何人であるかとお尋ねになりましたスルと其人イヤ怪みなさるな此方は彼の南山五十鈴川の上にある皇太神である師の恒に此處に在て大法を布衍せらるゝは誠に吾れの幸ひである今は特に來つて威音那昨の最大事を聴きたいと思ふのであるが我が爲めに之が開示を聴さるゝやと時に禪師は手に拂子を執り跪坐して仰せらるゝやう夫レ威音那昨ノ最大事夫レ誰カ之ヲ説キ誰カ之ヲ聴カンと太神は莞爾と笑を含み渠泊ノド説キ我レ泊ノド聴クとて徐ろに座に進み更に詳説を請ふとの仰せてあつたから禪師は密に之を説き

密に之を示されました太神は更に大乘戒を授からんことをお望みになりましたゆゑ師時に金剛の寶戒をお授けになりました爾うして佛戒をお受になるには戒名の必要があるので禪師は更に

高麟淨永大禪定門

といへる尊名を奉つて懇ろに大乘の心地戒をお説きになりましたさて諸君威音那昨の最大事とは如何なることでありませうかこれは唯り太神の問答とのみ聞き流しになさらぬやう是れソモ何事ぞと深く精細をつけて御工夫になるが肝要であります我が禪門に於てのみてはなく佛法研究の一大事として人生の最大要點として明らむべきものは乃ち威音那昨の一着であります

威音とは佛の名であるがこれはマサカ爾ういふ個體の一佛が居られるといふのではありませぬ之を佛教では法身法性とも真如法界とも自性天真佛とも父母未生以前の自己とも本來の面目とも將た人々具足箇々圓成の主人公とも申

すのであります。依て之に相見し之を會得し之に契當するのが心地開明である。太神の之を發問せられたのは、御自身の爲めであらうか、將た國民利益の爲めであらうか、縦ひ御自身の爲めなるにもせよ、國祖によりて此語を聞くからには國民たる互は、太神に啓發せられたるものとして、大いに研究しなければなりません。

第十 太神の布施物

時に皇太神に於かせられては、非常に満足せられ、何か御禮を致したいが望みは御座らぬかと仰せらるゝゆゑ、禪師の申さるゝやう、僧侶の事として別に世間に望みもない事ですが、この土地は兎角水利に不自由を感じまするので、その水さへ充分ならば、外に何の不足も御座らぬと語られました。たゞ夫れならば宜しい、早速清水を獻じまするにより、明朝孤松千尺の下を見られよと云ひ訖つて辭し去られました。夫れから翌朝衆を率ゐ錫杖をついて後の山を此處彼處とお尋ねになりました所が、果して長松の下より清泉が滔々と涌出してをりますので、禪師も殊に感激せられ衆僧も大いに驚いたのであります。此事が誰れ云ふとなく、遠近に知れ、渉り分けて

尊敬の念を増したとある、その水は今に神明水と稱へ山後より淨眼寺の用水に引いてあります。拙稿は寺から十町もある所なれど、態々其處に案内を得て實見致しました。その近邊には、只今の所て樹木も繁つてをりませぬが、只その水源に目通り一丈もあらうかといふほどの大杉が二本植てありました。此んなことは不思議といへば不思議なれど、藝州廿日市の洞雲寺には、金岡水とて、嚴島の主神より受戒の御禮として賜つた清泉が今に現存してをります。又長州の太宰寺には、住吉明神より賜つた温泉があります。之が争はれぬといふは、そが時あつて他人の手に所有權が移ると、その温泉が出ないやうになつて浴客を引くことができぬやうになるさうです。仕方がないから寺に返すと復た本の如くに涌きでるさうで、如何に疑ひの深い理窟をこねる人でも之れには舌を捲いてをるといふ事です。夫れから推して見てもこの神明水の靈泉たることが信じられます。

第十一 神賜の三寶物

夫れから更に一童子をして、金盆に藕絲の袈裟と白石の念珠と、金朱の香合とを御

布施として御下賜になりました時に三物は留めて淨眼寺の至寶とし金盆は後世
淨論の端緒となるからとて高弟の物先に命じ銷融して國寶に貿易せしめさうし
て勢北の深溝村に一寺を創建せしめられましたそれを金剛山向西寺と名けられ
ました俗に或は金盆山とも申すのぢやさうです
ソコで現存せる三物は大切にしておいて寶藏に納めてあるのですが抽袴が態々拜觀を
願ふたものですから方丈は喜んで許されました抽袴は法衣を着し三拜九拜し謹
んで親しく拜觀の榮を得ました

その中で白石の念珠と堆朱の香合とは少しの毀みも生じてをりませぬけれど藕
絲のお袈裟だけは何分四百二三十年にもなるものですから多少破損の箇所もあ
りましたその袈裟は環附にて九條衣で色は黄色でありました中にも誠に結構な
ものぢやと思ふたのは白石の珠數でありました手に把て鳴らして見ましたが如
何にも善い音が致しました

今の住職大辻師は予が主幹せる通俗佛教新聞の愛讀者でもあり又多く抽袴を
愛讀して居らるゝ人であるからモウ何も憚りなく其外ありと有らゆる寶物を

残らず拜觀せしめられました御開山の御著なる碧巖鈔三卷これは復寫のやう
てした又眞筆の法華經七軸は立派に保存せられてあり又大空禪師の墨蹟も軸
物になつたのがありました又開山堂には

皇太神宮の御尊牌も立てられてありましたその形は木牌の金箔塗にて寶劔に
形取り兩側に雲煙の形が造つて二尺五寸許りの長けてありましたその開山堂
は鶯鳥張といふので有名なもの

第十二 紫衣と禪師號

明應五年丙辰は師の高齡六十九歳でありました人が人皇百四代後御門天皇の上
聞に達し爾ういふ高僧から説法を聞きたいとの御聖旨より遙かに宮廷に招かれ
座を賜うて道を問はれましたその御奏對が一々聖旨に稱ふたものと見えまして
優渥なる御布施物もあり且つ紫衣並に佛性活通禪師の號と御繪旨とを御下賜に
なりました

その御繪旨及び紫衣は同じく淨眼寺の重寶として保存せられそれも親しく拜

觀の榮を得ました併し紫衣の如きは最うホロ／＼になつて居ました
大空玄虎禪師は斯ほどの高僧でありましたから地獄谷の退治もてき皇太神も歸
依して聞法受戒なさせられたに相違ないことを堅く信じて疑ひませぬ是に由て
佛戒の貴きことを知らなくてはなりません
而して師は永正二年乙丑の七月二十三日世壽七十八歳にて坐化せられました夫
れから當明治三十九年まで四百一年になります

第十三 永平正傳教授戒文

戒文ニ云ク夫レ諸佛ノ大戒ハ諸佛ノ護持シタマフ所ナリ佛佛ノ相授有リ祖祖ノ
相傳有リ受戒ハ三際ヲ超越シ證契ハ古今ニ聯綿タリ我ガ大師釋迦牟尼佛陀摩訶
迦葉ニ付授ス迦葉ハ阿難陀ニ付ス乃至嫡々相授シテ幾世々頭和尚ニ到ル今將ニ
付授シテ佛祖ノ深恩ヲ報シ人天ノ眼目ト爲ラントス蓋シ佛祖ノ慧命ヲ嗣續スル
者ナリ

第十四 三歸戒

戒文ニ云ク應ニ佛法僧ニ歸依スベシ三寶ニ三種ノ功德アリ謂ユル一體三寶現前
三寶住持三寶ナリ阿耨多羅三藐三菩提稱シテ佛寶ト爲ス清淨離塵ハ乃チ法寶和
合ノ功德ハ是レ僧寶ナリ是ヲ一體三寶ト名ク
現前ニ菩提ヲ證スルヲ佛寶ト名ク佛ノ所證ハ是レ法寶佛法ヲ學スルハ乃チ僧寶
ナリ是ヲ現前三寶ト名ク天上ヲ化シ人間ヲ化シ或ハ虚空ニ現シ或ハ塵中ニ現ズ
ルハ乃チ佛寶ナリ或ハ貝葉ヲ轉ジ或ハ海藏ヲ轉ジ物ヲ化シ生ヲ化スルハ是レ法
寶一切ノ苦ヲ度シ三界ノ苦ヲ脱スルハ乃チ僧寶ナリ是ヲ住持三寶ト名ク佛法僧
ニ歸依スル時諸佛ノ大戒ヲ得ルト稱ス佛ヲ稱シテ師ト爲シテ餘道ヲ師トセザレ

第十五 三聚淨戒

△第一攝律儀戒教授戒文ニ云ク諸佛法律ノ窟宅トスル所ナリ諸佛法律ノ根源ト
スル所也

△第二攝善法戒三藐三菩提ノ法能行所行ノ道ナリ
△第三攝衆生戒凡ヲ超エ聖ヲエ自ラ度シ他ヲ度スルナリ

第十六 十重禁戒

- △第一不殺生戒生命不殺佛種增長シテ佛ノ慧命ヲ續グベシ生命ヲ殺スコト莫レ
- △第二不偷盜戒心鏡如如ニシテ解脱門開ク
- △第三不婬欲戒三輪清淨ニシテ希望スル所無シ諸佛同道ナルモノナリ
- △第四不妄語戒法輪本ヨリ轉ジテ利スコトモ無ク欠クルコトモ無シ甘露一酒シテ眞ヲ得實ヲ得ルナリ
- △第五不酤酒戒未タ將來セザルニ侵サシムルコト莫レ正ニ是レ大明ナリ
- △第六不說過戒佛法ノ中ニ於テ同道同法同證同行ナリ過ヲ説カシムルコト莫レ亂道セシムルコト莫レ
- △第七不自讚毀他戒乃佛乃祖盡空ヲ證シ大地ヲ證ス或ハ大身ヲ現ジテ空ニ内外ナク或ハ法身ヲ現ジテ寸土無シ

- △八不侵法財戒一句一偈萬象百草ナリ一法一證諸佛諸祖ナリ從來未ダ曾テ侵マザル也
- △第九不瞋恚戒退ニ非ズ進ニ非ズ實ニ非ズ虛ニ非ズ光明雲海アリ莊嚴雲海アリ
- △第十不謗三寶戒現身演法ハ世間ノ津梁ナリ德薩婆若ニ歸ス稱量スベカラズ頂戴奉勤スベシ

我が門に於て受戒と稱するは以上の三歸依と三娶戒と十重禁との十六條戒である、この十六條戒は悉く心地無相の大戒である、之を菩薩戒とも申す金剛の寶戒といひ、將た大乘心地戒といふも亦みなこの十六條戒である、神々の受けられたるも此外に出でず、僧尼および信男信女の受くるのも亦この佛戒である

衆生佛戒ヲ受クレバ即チ諸佛ノ位ニ入ル位大覺ニ同ウシ己ル眞ニ是レ諸佛ノ子ナリ

授戒の勸め

高田道見述

●お爺様への勸め

▲お爺様今日は〇へい〜お出てなされたか何の御用でゴンス
 ▲イヤ外ではないが今日は勸戒に参つたのです〇へい勸戒とは何の事でゴンス
 かいナ〜▲イヤサあのネイ今度お寺で授戒が勤まるのでナ〜お爺サンもお付に
 なつたら宜からうかと思つて、それを勸めに來たのサ〜〇へいお授戒とは何の事
 ですかネ〜▲お爺サン知らばつくれては不可ないよ〇ダツテ私は知らないから
 よ▲アレツ呆れたお爺サンぢやナ〜お爺サン自分の宗旨は知てをりますか〇へ
 イそりや知てをります禪宗です、禪宗でもいろ〜あるさうですが私の宗旨は
 曹洞宗とやら申すのぢやさうです
 ▲ては宗旨の必要といふ事を知てをりますか〇へイそりや死んだ時に拜んで

貰はんけりやならないからよ▲何うして拜んで貰はんけりやならんと思ふので
 すか〇そりや善い處へ生れて往く様に迷はん様に成佛する様に拜んで貰ふので
 す

▲お爺サンそれも爾うぢやがそれ許りては本當に善い處へは往かれないのぢや
 よ、本當に善い處に生れ様迷はん様に成佛するには是非一度授戒に付かんければ
 不可ないのぢや〇へい授戒に付くとは何うするのですか▲そりや七日の間お寺
 へ詰切にして行をするのぢや

〇行なんか俺等に逆も出來すまい▲行と云つたからとて其んなに六ヶ敷い事
 てありませんよ自分の宅で家業をしてをるよりも容易いのです毎日三四度の説
 教を聞いて三度の飯をば給仕をして貰うて喰ひ、それから禮佛とて佛様を拜んだ
 り、退窟になればお茶を呑んで休息し時到れば寢間を敷いて貰うてグウ〜と寢
 るのさ〇へい如何サマそりや勿體ない、それこそ此世の極樂ぢや、でも只ぢや〜不
 可ませんナ〜▲そりや無論の事よ地獄の沙汰も金次第といふぢや、ありません
 か、まして極樂の沙汰ぢやもの宮寺へ参つても賽錢を上げずに拜んでは御納受が

なにお經を纏んで貰うてもお布施をせにやなるまいが、お布施を澤山するのが檀頭といふのでお寺に行ても幅が利く、お宮へ参つても肩身が廣いまして、極樂浄土へ只文目で行けやう筈はない、去り乍らそりや、賸繰金で付かれるのぢや、其な心配する程の事ではないよ

○では付きませうかねい ▲お付なさい帳面に姓名を着て置きますよ、では啓建とて始まりの日から支度をして参りなさい待てをりますよ

○ハイ／＼ではお頼み申します

● お婆様への勧め

▲御免なさい ○ハイイ ▲今日は天氣で ○左様結構なお天氣でございます ▲お婆さん今日は勧めに来たんぢやよ ○ハイ何てござんす ▲イヤ外ではない今度ナ、お寺でお授戒が勤まるのよ夫れてお婆サンへお勧めに来ましたのナ

○ハイ夫れはまあ御苦勞サマ私はモウ年が寄て何方へも出たことはないのて宅に留守番許りしてをりますので ▲てもナア無常の風が吹いて来ると何時までも

留守番許りはして居られませんかよ是れまでツイぞ見たこともない死出の旅路へ出て行かんければならんからの ○夫れや爾うです ▲サア夫れぢやから勧めに来たのよ、その死出の旅路の連とも杖ともなるべきものにはお授戒ばかり言やワイナ、お授戒に付てお血脈を貰うてさへ置けば何時無常の風が吹いて来たかるとて少しも怖いことはないから一度付て置かれた方がお爲ぢやと思ふのですよ ○夫れはまあ結構な事ではありますすが何うも足腰が自由にならんので起居がキツウ苦しうて御拜などは出来すまいよ ▲でもお婆サン位な年格好の人は澤山に付て居られますし、御拜と申したとて、一々起たり坐たりしなくても坐たなりは少しづつ、頭を上げたり下げたりして居れば宜いので思つた程の事はありませんよ、宅に後たからとて居坐てばかりをる譯には行かんてせうが ○ハイ／＼夫れは爾うですとも時には茶の下も燃してやらねばならず水も少々は汲んでやらねばならず、戸の開け閉てから掃除まで、時には洗濯もせにやならず、年寄は年寄相應に忙がしいものであります ▲授戒に付くと三度の飯も給仕をして戴かれるんぢやし、床も敷いて貰はれるし、

其上戒師様や説教師様から夜晝三四度の説法を聞かされるし又有り難いお経も絶間なく聞かれるのぢやし風呂にも毎日入られるのぢやから宅に居るよりも餘程氣樂で安心して其上賑かて面白くて有り難いのぢやから世にも此んなに結構なことは無からうてはないかお婆サン○イヤ本當に爾うですよても爾うして戴くにはお金かねが随分掛るてありませう

▲イヤお金は何程も入らないのよホンの巾着きんちやく錢ぜにで澤山たくさんです宅うちに居たからとて喰はずには居られんのぢや夫れをお寺へ持出して喰ふと思へば夫れて宜いのぢやそれに少し増してお冥加めいが錢ぜにを巾着に入れて行けば宜いのぢや○それではお寺に御損ごそんが行くてありませうが▲イヤ仕出し屋しだしやとは違つて金儲かねもちをする爲ために授戒じゆかいをするのではなく授戒じゆかいの大法會だほふかいを勤こむるが爲ためにお齋さいを出すのぢやから手一杯いっぱいに行けば頂上ちやうじやうなのである多人數たにんすうの膳部ぜんぶを一緒にするのぢやから減多げんたに損そんの行くやうな事ことはないものです御方便ごほうべんなもので或は篤志とくしの人があつて供養料くやうりやうりやうを寄附よせつけし施餓鬼せがく料りやうを納めたり祈禱料きとらうりやうを納めたりせらるゝので案外都合あんがいごうごよく行くもので其んな事ことまで心配しんぱいするには及びませんよ○ては付して貰もらひませうかナーもし▲宜よろしい帳ちやう

面に着けて置くから乾度かつた最初はじめの日ひから参りなさいお待ち申して居りますよ

●主人への勸め

▲頼たのまう○ドレ▲當家たうけの御主人ごしゆじんは御在宅ございざくでありますか○ハイ居られます何の御用ごようでありますか▲私わたくしは安樂寺あんらくじの住職ぢゆうしやくでありますか来る十五日ごじふごから授戒會じゆかいかいを營やむに就つきまして烏渡御面會くわたりごめんかい申したいのですから左様仰さやうつしやつて下さい

○ハイ承知しょうち仕しりました且かつ那樣なやう菩提所ぼだいじよのお住持ぢゆうぢが一寸お目に懸かりたいとて御出ごいでになりました夫それれては此方こなたへ御案内ご案内申せ

▲時に早速さつそくでありますか来る十五日よりあの有名な戒師様じゆしやうを請待しょうたいして授戒會じゆかいかいを修行致しゆぎやういたしたいと思おもひますか貴君あなたにも今度こんどは付ついて貰もらひたいと思おもうて今日こんにちはお勸すすめに参まゐつたのです○ハイ左様さやうですか併ひし授戒じゆかいへは多く老人らうじんが付つくてはありませ

んか
▲左様老人さやうらうじんがまあ比較的多用ひかくたでないから何うしても多いのは事實じじつでありますか中年ちやうねんの人ひととて付つかぬ譯わけではない付つく氣きになりさへすれば付つれます○ても我々われわれが

老人の中間に這入ては變てはありませぬか

▲コレは怪しからぬ佛戒を受るに何の憚る事がありませうぞ壯年の人にして世に活動する身こそ受戒して貰はんければならん老人とて別に撥斥するのではありませぬが老人は老人で現世よりも何方かといへば未來に重きを置くものではすから切めては未來後生の土産にとて受戒する人も多い譯ぢやけれど戒法は何も敢て未來後生の爲めばかりではない現世を重んずる人の爲には現世の利益となるのでこの授戒に付ぬ人は眞實の佛教徒佛信徒とは申されないのである○其んなに理窟詰にせられては困りますチイ▲コレはしたり困るとは怪しからんこと何も敢て窘めに來たのではありませぬよ僧侶の本分として住職の職務として善事を勸發に來たのですワ私を住職としたのは布教傳道に従事せしめて檀徒の者を引入れやうが爲めてありませうが

○それは無論の事です

▲夫れぢやからサ貴下からして授戒に付いて見せると他の者があの人ですら付かしやつたのぢやからと云つて皆なが付くやうになるして見ると人に善を勸む

ると同様ではありませぬか○では仕方がない付くと致しませう▲ハイく有難う、コレで占めたものぢや後は將基倒しイヤ結構ですそれでこそ檀頭様ぢや貴下、始めから詰切にせにやいけませんよ○エイ付くからは詰めますとも

●奥様への勧め

▲奥サンも一緒に付かせましたら宜いてせう○サアあれは何うでせうかブセウものですから

▲貴下から爾う仰つしやつてはいけません貴下が付きなされば奥様も付きたいに相違ない奥サン一寸此方へ○イヤ方丈様お久振りでございますイツモ御無沙汰許りて濟ませんまあイツも御機嫌で……

▲先刻から阿誰もお聞きになつて居なされたてありませうが旦那様は今度授戒へお付になる様にお勧め申したのですが奥様も一緒に付なされ○ハイお勧めに預りまして有り難うございますけれども私が出ましては宅が困りますよ

▲亦其んな事を云ひなされる一遺托生といふ事もありますから旦那様の成される

ことは奥様も爲て置きなさらんと二世も三世も深き契を結ぶことは出来ませんぞ

○イ、へ最う今生一世丈で澤山です

▲冗談ぢやありません僅か一週間の事です宅は何うてもなりませんわい、お付なさい旦那サン貴下に御異存はないてせう

○へいあれが付く氣にさへなれば

▲夫れ旦那サンのお許しが出た宜しい帳面に着けました

○では方丈サン無理往生させやうと成さるのですネー▲牛に牽かれて善光寺参り今はイヤな様でもナ三日も経つと奥様の方からよくまあ勸めて呉れたとアベコベに御禮を仰つしやるのは受合へい左様ナラ

●息子殿への勧め

▲御両親息子さんはナト病身な様であるが授戒へ付くと身の御祈禱になつて身躰も必ず健康になります幸ひ中學校も終つた所であるから授戒に付かせましては

何うですか

○サア何うも此節の者は生意氣ですから逆も授戒なんどの事は耳に這入らんでありませう

▲でも御両親で御異存さへなければ私しが勸めて見ます

○へい何に別に異存とはありません俸が付くといへば付かせます

○何うてせう授戒に付かれては一躰君は怯弱な質であるから一度授戒に付くと精神が爽かになつて身躰が健かになりますぞ

○和尚サン厭なことを云ひなさるなあ怪態糞のわるい

▲ハテナ是れは怪しからん怪態糞がわるいとは○ダツテ貴僧授戒なんど彼んな事は迷信家のする事ぢや有りませんか▲迷信家ハテナ爾うすると佛教を信する者は残らず迷信家であらうか○イヤ一概に爾うと許りは云へませぬけれど

▲でも授戒が迷信ならば爾うなつて来るあの釋迦といふ人は聖人であらうか凡人であらうか○ありや世界の四聖とも云はれましてカントソクラテス釋迦孔子此れは世界の大神人ぢやと聞いてをります

▲今私がいふ授戒とは其の大聖人たる釋迦如來のち立てなされた教法の根本土臺でありますよ

▲あの聖徳太子即ち厩戸王子といふを知て居ますか○それや知て居ます、あれは制作の聖人とも申して推古天皇の時攝政の役を勤められ萬機を一手に引受て統御なされた御方て政治文學工藝百般の事を始められたと聞いてをります

▲佛教神道儒道も太子の御力に依て弘めさせられたといふ事を知て居ますか○サア夫れは善く存じませぬけれど、或は其の方面にも力を盡されたのかも知れませぬ

▲かもぢやあ困る此れは觀音大士の御化身にて佛法を興隆し世を救はんが爲に王子の身を現じられたので、日本の佛教は全く此人が基礎を固めさせられたのでありますして見ると授戒の基礎も太子の御力に依ると云はねばならぬ、怪態養の悪い筈はない、又君は最明寺殿時頼公の人と爲りを知て居ますか

○ハイあれは鎌倉時代の執權職で何うして度惠來人格であります

▲あの人が日本曹洞宗の初祖道元禪師即ち承陽大師から菩薩戒を受けて、法の弟

子になられたことを知つて居ますか○其んなことは存じませぬ其んな事が有たのですか

▲今時の若い人は夫れぢやから困る○ハイ爾うてすかネー

▲今の鎌倉建長寺は時頼公の建立であります、公は道元禪師に深く歸依せられ弟子の禮を取られた故道の字を一字與へられ法號を道崇と付けられました、建長寺に道元禪師を招待する積りて建立せられたのぢやけれど、山奥でも越前の永平寺の方が善いとて固く辭退せられたものぢやから、道元禪師の徳を慕うて支那から渡られた隆蘭、深即ち道隆禪師を代りに請待して開山とせられた禪師は臨濟宗の人で有たから、寺も今は臨濟宗の本山になつてをる、ソコで時頼公の辭世に

業鏡高懸 三十七年

一槌打碎 大道坦然

斯ういふ辭世を遣し生死岸頭に於て大自在を得られたのも偏へに二禪師に就て戒法を授かり、禪法を修せられたからの事です

▲君は楠公の人と爲りを知て居ますか○ハイ、楠公てすか、今時の青年て楠公の英

雄にして古今の一大忠臣たることを知らぬ者は恐らく一人もありません

▲其人の宗教を知つて居ますか

○イヤ夫れは知りません ▲だから困る其んな事では楠公を知つたとは申されな
いあの人が湊川の合戦に深く討死をしたのも参禅の力と云はねばならぬ ○夫れ
は又何うして ▲あの人は夙に禪定を修し討死をする間際になつては楚俊禪師に
参じて生死の一大事を決断せられた生死交謝の時如何…… 兩頭俱に截断すれ
ば一劔天に倚て寒しとの話しは名高いものぢや ○ハテ其んな事があつたのです
かねイ夫れは初めて聞きました ▲凡そ佛法に依て安心立命した人て心地戒を受
けぬ人はありませんよ ○ですかいナア

▲君は太田道灌の人と爲りを知て居ますか ○ハイ、あれは今の宮城即ち江戸城
を築いた智勇兼備の英雄であります ▲ては其人の宗教を知て居ますか ○イヤ夫
れは知りません ▲夫れぢやあつらんあれは左金吾源持資といふ人て春苑道灌
居士といふは其の法號である此れは武州龍驤寺の泰叟和尚東京芝青松寺の雲岡
禪師等に参じ深く禪の奥義を究めた人である定正といふ者の爲に謀られ入浴の

時四面より鎗先を横へられて死に就くに臨み

敵手より君は平日和歌を好む今の時に臨んでは逆も駄目であらうなと云はれ待
て〜といひざま

可加留土幾左古曾伊濃知乃遠之加良米賀禰天奈機美等於毛比之良須波
と詠み自若として死に就かれたこれも全く宗教の力である

▲君は尙ほ甲斐の信玄越後の謙信が金剛の寶戒を授つて膽力を養ふた事など
御承知あるまい徳川家康公を始め代々の武將及び學士が佛法に歸依し授戒など
せられたことはあまり御承知がない様ですナ

○ヘイ、ドウも其邊のことはまだ存じません ▲碌々宗教のことを知りもしないて
怪態蕪が悪いとは餘んまり口が悪いぢやないか ○ハイいや何うも恐れ入りまし
た

▲まだ〜
君の恐れ入ることがある

○夫れは又何ですか ▲それは御代々の天子様が授戒入道あらせられた事柄であ

る〇へーイ天子様が?

▲左様サそれがサア百二十四代の中で三十七代もあらせらるゝのです

●天子の御受戒

四十五代	聖武天皇	四十六代	孝謙天皇
五十四代	仁明天皇	五十一代	平城天皇
五十五代	文德天皇	五十六代	清和天皇
五十七代	陽成天皇	五十九代	宇多天皇
六十代	醍醐天皇	六十一代	朱雀天皇
六十二代	村上天皇	六十四代	圓融天皇
六十五代	花山天皇	六十七代	三條天皇
六十九代	後朱雀天皇	七十一代	後三條天皇
七十二代	白河天皇	七十四代	鳥羽天皇
七十五代	崇徳天皇	七十七代	後白川天皇
八十代	高倉天皇	八十二代	後鳥羽天皇

以上の方が皆授戒入道して佛弟子に成らせられたのであります。殊に聖武天皇様の如きは自から三寶の奴とまで仰せられ唐より鑑真律師といふを請待し天皇を始め皇后太子公卿等四百三十四人一同に御授戒成されたこともあります。剩へ日本國中の臣民にも授戒せしめんが爲め日本に三戒壇を築かしめられたこともあります。

○シテ其の三戒壇といふは何處々に定められたのですか
 ▲そは大和國奈良西提寺下野國では藥師寺筑前博多の觀世音寺

○ハテ何うも其んな事があつたのですかいナ▲斯くの如く歴史に昭々たる事であればマサカ迷信とは云はれますまいネー○イヤ何うも恐れ入りました

●神々の受戒

▲君のまだく恐れ入る事柄があるんですよ○それは又何ですか
▲それはナ日本の神々が授戒なされた事柄ですハ○神々がヘーイ
▲驚くでせう○そりや虚妄ぢやありませんか▲何うも井蛙に大海を語るナ夏蟲に氷雪を語るナといふ事は人を欺かぬ格言である

○でも有り得べからざる事ですもの

▲サア爾う思ふのが井蛙の見といふもの法華經の中にも無智の人の中では此の妙法を説くな信じないから梵網經の中には外道痴人の中て戒法を説くな却て誹謗を生ずるからと申してあるからもう止めにして置ませう○では私を外道痴人とし無智の人と見捨にせらるゝのですか▲左様サ頭から虚言ぢやらうなぞと言はるゝ所を推して見ると少しも佛法を信ぜぬからあんな言葉がてるのぢやら

うと思ひます

○それは失敬でした決して爾うてはありませせん先刻からの話して餘程感心してをるのですが餘まり意外であつたから一寸疑つて見たのですけれど、お聞き申して見んと分りませんから何うぞ聞かして下さい

▲では私の話すことを信じますか

○ハイモウ決して疑ひは致しません一々信ずる積りてあります

▲ではお話し申しますがネイ先づ日本の祖神たる天照太神がお授戒なされたのですからのハ○ハアアですかネイ▲この御神は伊勢國一志郡阿阪村正法山淨眼寺開山大空玄虎禪師の室に入て金剛の寶戒を受けたまふたのです(此事は已に本誌第一年第八號の全面を埋めて確報致しました然して其の戒名は

高嶺常永大禪定門と申上げ右の淨眼寺に今ても劍形の位牌が立られてあります又授戒の法禮として納められた藕絲の袈裟水晶の珠數金朱の香合及び靈泉までが現存してをります○ハテなあへーイ

▲夫れから豊前の香良明神は日本天台宗の始祖傳教大師から受戒せられ▲宇佐

八幡太神は日本真言宗の始祖弘法大師から授戒せられ▲越中の立山権現は同國立川寺の大徹禪師より授戒せられ▲住吉明神は長門の太宰寺定庵禪師より授戒せられ▲藝州宮島の主神は同國廿日市洞雲寺開山金剛用兼禪師より授戒せられ戒名は天長地久大姉▲豊前の彦山権現は同國護聖寺璋山禪師より授戒せられ▲加賀の白山権現は同國大乘寺開山徹通禪師より▲丹波の白蛇明神は同國永澤寺開山通幻禪師より▲周防長尾池の大蛇は中翁禪師より佛戒を授かりました其他枚舉に遑あらず今日は勸戒の事とて長い話しをしてをる暇はありませぬけれど荒増か様な次第であります何れも皆確かな證據が遺つてをるから仕方がない▲冥府の閻魔大王は小野篁を介して徳道上人満慶上人より授戒せられました○イヤ實に威服致しました爾ういふわけなれば我等如き一凡人が臭口を開いて彼此申さるゝ譯のものではありませぬして授戒に付けば其んな話しが聞かれるのですか

▲爾うですとも私の様な下手な話しではない戒師様や説教師様の話しは立板に水を流す如く流辯滞りなく一週間日夜三四度づゝ有難い説教がありつめるの

です

○では私も付かして戴きませうかネイ▲是非付なさい君の様な若い人に付いて貰はんと張合がない○ではお父様に爾ういつて付かして貰ひませう▲君さへ付く氣になればお父様は御承知でありますよ

●嫁嬢への勧め

▲嫁御サンアナタも授戒へお付なさい○和尚様まあ滅相な▲何うして○ダツテ私等の様な年若のものが授戒などへ行かれは致しますまい▲爾うすると授戒會は年寄の集会所と思つて居るんですか

○爾うぢやありませんか

▲老人が多いに違ひはないけれど老少不定は世の習ひといふこともある今の内に都合して付かなければ後悔する事が無いにも限りませんぞまあ家事も忙がしからうて無理にはお勧め申さんけれど都合が成るならお付なさい御身の祈禱になりませよ又家事を治むる上に就ても何程利益になるかも知れませんよ又子供

を養育する上に就ても非常な扶けになります。○爾うすると授戒は後生の爲ては
ないのですか。▲授戒は今世安穩後生善處とて現當兩益の爲てすよ。まあ授戒に付
いて善く説教を聴聞して置きなさい。爾うすると舅姑につかへる上に於ても大
いに心得となります。又年老いてから自分が姑になつた時の心得にもなります。
○てはまあ私の一料簡にも参りませんか。克く相談致しまして参られる様なら
ば跡より御通知申上げますから宜しう願ひ申します。

●娘嬢への勸め

▲當家の娘嬢も一度授戒へ付て置きなさらんか。○へい。まあお説教でもよく聴
聞させて置けば爲にはなりません。せうけれど耻かしがつて何うてせうか。▲若し獨身
ていやなら伯母さんと一處にお出で。○おまへも授戒に付かい。○御母様と一處
にならば行つても宜うござんすけれど人様から笑はれるてありませうよ。▲賞
分ても笑ひ人はありませんよ。○御母様サウしませうか。○おまへが行く氣になれ
ば連れて参りをしてよい。▲お嬢サン思ひ切つて付なさい。ア、ナタ等は此れから

世の良妻賢母となるので良人の家に嫁し付かねばならぬ身の上ぢやもの
一度授戒せし身の上は護戒神といふ多くの神々が日夜に守護して下さるから、一
切の災難を通れ、一切の願望が成就するとあります。
殊に懐妊した女の人が受戒すれば母子共に廣大の功德を蒙り安産するぞと、
に説いてあります。』

- 「亡戒」といふは亡靈の爲に血脈を受けて幽苦を救ふのである
- 「代戒」といふのは亡者の爲にするもあり生者の爲にするもあり
- 「因戒」といふは生者亡靈の爲に因縁血脈を受けることである
- 「戒師」といふは嫡々相承の佛戒を授くる人のことである
- 「教授師」といふは受戒の儀式作法を教授する導師の事である
- 「印證師」といふは戒弟と戒師との間に立て印可證明する人である
- 「直壇」といふは授戒會の總指揮官ともいふべき役目である
- 「室侍」といふは戒師の侍者にて血脈を拵へる役目である
- 「典座」といふは戒會の飲食を司るところの役目である

●維那「はぶ經を讀む可。知殿は佛菩薩の供養を司る役目である。」

金剛の寶戒

天照大神も大空玄虎禪師から金剛の寶戒を受けられたと申すのであるが、ドンなものも金剛の寶戒なのであるのかと疑ひを抱いてをる人もあらうが、菩薩の十六條戒が直に金剛の寶戒ぢや、金剛は堅固不壞の徳を具してある寶の名である。○本業瓔珞經に「菩薩戒は受法有りて捨法無し犯有れども失はず未來際を盡す」とある。是が即ち金剛不壞の義であるやれ有難や勿轉なやといへる眞實眞如の一念信が發起すれば直に得戒である心華開發の時節である。金剛不壞の寶戒を受けたといふことにもなる。金剛の寶戒は是れ諸佛の本原行菩薩道の本原佛性の種子ぢやとある。又之を受け已りしものを眞に是れ諸佛の子なりと仰せられてある。種子佛子の文字に着眼して解毒圓吞の誤解なきやうに願ひたい。

南無三世諸佛

南無は梵語であるから囊讀とも書てある故にナムともナウホともナウマクとも。ノモともいふ皆梵音の訛りである。翻譯して歸命とも歸依とも歸投度我教我ともいふ成は之を請求の一念とも申して頼み結ぶの一念ぢや身も心も諸佛の方に打込みて任せ申して全く自己を忘却して了ふのぢや、自己を忘却するとは己れを忘れて了ふのである。己れがくといへる我見をスツカリと涙じた時が諸佛と同體になつたのである。三世とは過去現在未來である。モット委しくいへば三世十方一切諸佛と唱ふべきである。三世は豎の時間十方は横の空間である。諸佛とは圓滿報身の盧舍那佛である。一佛か多佛か多佛か一佛か一多の邊際を問ふには及ばぬ、只一心不亂に稱名禮拜すれば功德無量である。

授戒說教附錄終

雲極禪師略傳

師諱は泰禪、號は雲極、常に隨處棲又は爾時庵、或は夢遊、或は矮道人と自稱せらる、師は越後新潟の人也、父は長野氏六代目の津右衛門大心院と號す、母は小原氏玉木産兵衛の姉なり、寶曆二年壬申九月廿六日を以て誕す、幼名を菊八といへり、幼稚の頃より香華院なる宗現寺に遊ぶことを好み給ひしに依り、乳母は殆ど毎日の如く相携へて寺に遊び夕刻家に歸るを例とは爲しぬ、年甫めて六歳の時、一日乳母を辭し、從僕の久二郎なる者を卒む宗現寺嶺隨和尚の膝下に投じて曰く我をして僧たらしめよと願として家に歸られず、故に父母も亦敢て其志を奪はず、未だ得度せざれども、人皆之れを呼ぶに菊禪といふ、是れ菊月の生誕なるを以て也

○冬日偶々隣寺の眞宗寺に使ひす、時に僧帽を被れり、寺主戯れて曰く、汝若し帽子を脱せは吾れ汝の用務を聞かむ、若し然らざれば聞くこと能はずと、師曰く我宗に於て此帽を脱することは其れ唯だ東司上なるのみ、我れ今此の座席を以て不淨の所と作すに忍びずとて遂に脱せられず、時に寺主嘆じて曰く是れ俗利の男兒なりと、即ち事を辨じて歸らる、其の幼時に於ける敏黠概ね是くの如し

○一日偶々父母の家に到り給ひしかば肉膳盤に盈てり、然れとも師之を食し給は



す、父母曰く汝は未だ得度、難染せされば則ち俗に異ならず何に依て之を食せざるやと、師曰く我れ己に釋氏に歸す、未だ得度せずと雖も何爲れぞ魚肉を食するに忍びひやと、父母聞いて之を耻ぢ、爾後戯れにだも復た言はざりき、父の曰く汝若し眞の出家たらむことを欲するものならば、則ち明且より夕陽に至るまで靜坐して起たざれ、然らば吾れ汝に一函八軸の法華經を與へむとす、可ならむや否やと、師速かに諾せらる、果して清且より兀坐して起ち給はざりき、父使ち經函を出して與へしに、師は欣躍斜ならず、急ぎ捧げて寺に歸り、孜孜として之を練習し給ふ、未だ幾許ならざるに八軸皆誦徹し、尋いて諸經論并に祖錄の素讀を爲さしむるに難なく之を覺えらる、時に敏悟の聲早くも四方に聞えたりき

○寶曆十年師の年九歳、春三月五日、授業師嶺隨和尚に就いて得度の式を了す、○翌春より禪誦の暇儒醫稻川左仲に就いて經書を學び、又淳信房に従つて詩文章を學び、親しく紫黃を乞はれき

○同十二年、師の年十一歳、此夏師兄智禪の圓寂を聞き、早くも哀悼の餘り偈を作つて曰く

正知三十歳 柏樹已喬哉 忽絶棟梁用 庭前寂自哀

○同年の秋、智嚴和尚に參す、嚴即ち問うて曰く、汝は宗現寺より來りし乎と、師曰く

我れ宗現寺より來らず、嚴曰く恁麼ならば何れの處より來る、師曰く即今和尚の面前に現ず、嚴曰く咄箇の小厮兒、早く汝が來處を知る、師曰く奈何せん、未穩在なることを、嚴曰く且く虚空落地の時を待てよと、師便ち禮拜す、爾しより已後夙夜趺坐を務めて怠らず、或は鐘樓に或は塚間に、端然として枯坐し給ふこと、恰も瘧者の如くなりき

○明和元年師の年十三歳、智嚴頻りに誨勵して曰く、龍樹祖師の曰く、若し般若を見ず、むば是れ則ち爲に縛せらる、若し人般若を見るも亦是れ縛せらる、と名く、若し人般若を見ば是れ則ち解脱を得、若し般若を見ざるも亦是れ解脱を得ると、且く道へ見と不見と、縛と不縛とは共に是れ枝葉なりければ、且く措いて之を論ぜず、畢竟何を呼てか般若と爲す、速に道へ速に道へとて劈脊に一拳を與ふ、師俄然漆桶を打破し、覺えず聲を發して曰く、般若々々と、嚴曰く莫妄想と、師起て推倒の勢を作す、嚴曰く與麼ならば、驢年にだも亦般若を得ざらむと、師曰く謹て師の證明を謝すと、嚴微笑して休す、師即ち左の一偈を打して呈す

一蒲團上久尋思 拳下忽然忘所知 拍手盧胡堪自笑 無端失却兩莖眉

兩三日を過ぎて將に丈室に入らむとす、嚴師の至るを識り、高聲に言て曰く、我れ汝が爲に障子を開かず、試に來つて相見せよと、師擬議して入ること能はず、且く障前

に默座す時に巖の彈指一聲するを聞き入て禮拜す是に於て巖親しく法要を示す
 ○明和八年師の年二十歳此夏下總成田山照峯律師に隨ひ兩部の密法を傳授す
 ○安永元年師の年廿一歳賀州大乘の祖俊に參じ問うて曰く乞兒飯碗を打破する
 時如何俊曰く好箇の時節師曰く某甲何に依てか此の保社に入らざる俊曰く入ら
 ば便ち得てむ師曰く今日入得の老和尚を拜すと
 ○同年の冬十一月授業師の訃音に接しければ即ち齋を設けて供養す因みに感佩
 あり曰く

慈鳥此去向那邊一子空餘舊巢前 反哺堪嗟猶未就 林間啼盡夕陽天

○安永七年師の年廿七歳此夏越後宗現寺光峯の初會に於て半座を領す

○天明二年師の年三十一歳尾州泉松寺鐵文樹公に參じ問うて曰く鈍鐵師の爐竈
 に入る乞師鉗鎚と樹曰く張公酒を喫すれば李公醉ふ師曰く鉗鎚の手鍛鍊の妙樹
 曰く妙處作麼生師曰く更に一盃を獻せむ樹呵々大笑す師即ち退身三步す樹曰く
 且坐喫茶と爾しより機縁相契うて親しく巾瓶に侍す其年の冬樹公三州永住寺助
 化の請に赴くや師も亦之に従ふ完戒の日偈を呈して曰く

空寂身心也太奇 修來懺去自無爲 方知衆罪如霜露 不待日輪照破時

乃ち問うて曰く已に是れ衆罪は霜露の如し師子尊者何に依てか宿債を免れざる

や樹曰く當頭霜夜の月任運として前霧に落つ師曰く與麼ならば一條の拄杖兩人
 昇く樹曰く作麼生か道へ拄杖子何れの處にか在る師曰く我に在る三昧我も亦知
 らずと樹曰く三十棒師曰く尙是れ賊過後の行令樹曰く個の多口の阿師師曰く罪
 犯彌天と即ち禮拜す師は遂に樹の室中に入て嗣法す樹因みに偈を付して曰く

青石由來錘斧頭 渾家四十二傳謎 而今拈出親相付 斫斷叢林拂拭傳

○師是より先安永八年の秋但州龍滿寺玄樓龍公に參じ因みに偈を呈して曰く

東海從曾問道名 嚮風千里不勝情 即今相見無多子 依舊眉毛著兩莖

乃ち問うて曰く相見の事は則ち問はず未相見の時請ふ和尚道へと樓背面す師曰
 く通身泥水樓曰く長老什麼と道ふぞ師曰く某甲に適來の話頭を還せ樓曰く失却
 々々師曰く此老賊樓曰く賊物何れの處にか在る師曰く秋風稍冷なりと乃ち人事
 す○又此頃洛の壽昌庵に於いて閑藏すること凡そ三年門を出て給はず

○天明二年師の年三十一歳四月九日永平寺に於いて轉衣の式を了す○同三年二
 月備後玉泉寺の請を受け初めて晋山す此冬初會を行ひしに禪袴四方より幅渡す
 ○同八年師の年三十七歳七月播州天正寺に移錫す○寛正四年師の歳四十一歳退
 隱して攝の般若峯に入る○同九年師の年四十六歳相州の保泉寺に轉住す○同十
 二年師の年四十九歳此の夏淨信士女の特請に應じて戒壇を開き戒脈を授與せし

もの凡そ一千七百有餘人○享和三年師の年五十有二歳僧録の命に依り、四月十五日を以て志州烏羽の常安寺に移轉す、是に於いて乎大いに州の宗弊を改革す、雲南亦翕然として輻湊す○文化元年二月衆の懇請に由り戒壇を開きて正傳大戒を授けらる、受者凡そ二千有餘、本篇の草稿即ち此時に成る

○同十三年二月十七日病無うして坐化す、世壽六十有五、法臘五十有七、嗣法の徒四人あり曰く佛山、象林、畫寮、穆應等はなり、得度の僧尼十有餘人、師の撰述多しと雖も未だ上木せられたるもの鮮きを遺憾とす、今印刷に附したる、授戒說教の外師の語録上下二卷と三時業落草のみは已に上木せらる師の徳を慕うて開山に請せしもの五ヶ所あり曰く岡崎村の常福寺、曰く甲賀村の福満寺、曰く築地村の正法庵、曰く和具村の龍珠院同劔光寺是なり

所感一則

由來吾宗ニ於イテ在家男女ニ對シ化門ヲ開クコト幾久シト雖モ其ノ之ヲ著シク振揮セシハ專ラ大政維新已降ニシテ爾來大イニ其歩ヲ進メタリ

惟フニ夫レ開宗茲ニ七百年其間高僧碩徳ノ輩出セシモノ其數ヲ知ラス、門流門下幾千百ノ龍象ヲ打出シテ隨緣度生ニ寧日ナク、隨ツテ禪篇語録ノ今日ニ傳ハレルモノ汗牛充棟モ雷ナラサル也、然リト雖モ在家化導ヲ標準トシテ説示セラル、モノニ至リテハ眞ニ曉星ノ感ナクンハアラス、是レ蓋シ上根ノ引接ヲ先トセル宗風ニ基因セルモノナル歟

此時ニ方リテ唯リ我カ雲樞禪師ハ今ヲ去ル一百年前、爰ニ見ル

所アリ、在家人ニ對スル垂手誘引ノ爲メ幾多ノ勸化落草ノ說示
 遺稿ノ在ルアリテ吾等法孫ハ常ニ之ヲ寶持シテ弘法利生ノ資
 料トスルコト年アリキ、今ヤ吾宗化導ノ盛大ナラントスル時ニ
 際シ殊ニ刊行流布ノ容易ナル昭世ニ逢ヒタルニモ拘ラス此等
 ノ遺稿ヲ僅少ナル法孫間ニノミ秘在スルコト頗ル愚ノ至リナ
 リトス、依テ運筆ニ鍛鍊ナル墻外老師ノ校訂ヲ經テ今此ノ本篇
 ナ公ニシ以テ天下幾千萬ノ道俗ト俱ニ其ノ醍醐味ヲ同ウスル
 ニ至リシハ吾等法孫ノ快感ニ堪ヘサル所ナリ、然レハ則チ本篇
 ノ刊行ヲ權輿トシ漸次此類ノ遺稿ヲ類纂シテ江湖ニ頒布スル
 ノ發意無キニシモアラス
 蓋シ師ノ遺稿ハ此等落草ノ譚ノミナラス、佛經祖典ノ說示提唱
 ナ筆錄セシモノ亦鮮少ナラサル也、然レトモ多クハ散逸シテ殘

存スルモノ僅カ十數部ニ過キス、此篇ノ如キハ即チ其中ノ一ナ
 リ、因ニ著者禪師ノ法系畧譜ヲ附シテ讀者ノ參考ニ資ス

太祖國師——明峯素哲——乃至——月舟宗胡——德翁良高——默子素淵
 鐵文道樹——雲樞泰禪

爾リ而シテ雲樞禪師ノ法孫今尙天下ニ散在スルモノ五十餘員
 アルヲ見ル、若夫道樹門下ヲ打算スルトキハ幾個百人ナルヲ知
 ラサル也

明治四十二年三月穀旦

福島縣梁川町興國寺現董

法 孫 嶽 尾 來 尙 謹 誌



明治四十二年四月十五日印刷
明治四十二年四月十八日發行

(授戒費教興付)
定價金八拾錢
(郵税金八錢)

原著者 故人 雲 樞 泰 禪

編校 纂訂者兼 高 田 道 見

印發 刷行者兼 東京市芝區愛宕町壹丁目十六番地
永 田 顯 了

印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
株式會社 秀 英 舍



發行所

東京市芝區愛宕町一丁目十六番地

佛 教 館

振替口座二九四六番

◎佛教館發賣書目◎

◎天佛教人生論

(高田道見師著)

洋本一冊 數紙千頁

●定價金貳圓卅錢 送料不要

▲本書は釋尊の教勅により人生の一代問題を解決して安心起行の方針に向はんとする者のため

◎從容錄講話

(高田道見師著)

上下四冊 和綴紙入

●定價金四圓 郵送料不要

▲本書は碧巖集と伯仲せる禪宗の第一書たり天童正覺禪師の頌古萬松老人の示衆著語等古來難

◎通俗佛教便覽

(著者 同前)

紙數六百頁 總クローヌ

●定價金六拾錢 郵送料金十錢

▲本書は通俗佛教一席話、追善の心得、通俗三世因果、四恩一夕話、十善一夕話、家庭教訓、家庭美

◎通佛教安心

(著者 同前)

全壹冊

●定價金三拾錢 郵送料金六錢

▲本書は問答牀に筆を起し通俗平易に佛教の根本原理に由り宗派佛教の安心義に偏倚せず直に

◎正信無常觀

(著者 同前)

折本壹卷

●定價金六錢 郵送料二錢

▲文字簡潔意義深遠、僧俗の別なく朝々夜々常に誦誦すべき通俗佛教の新經典たり、是れ著者か

◎佛教疑問解答集

(著者 同前)

第三篇

●定價金壹圓 郵送料金十錢

▲本書は教義上に關する諸種の疑問に對し嚙て介める如く一々明瞭に解答せし未付有の珍書也

◎佛教問答集

(著者 同前)

全壹冊

●定價金五十錢 郵送料金八錢

▲本書も亦前書と同く三十餘種の疑問に對して痛快に解答を附したる輕便必須の珍本なりとす

◎物外和尚逸傳

(著者 同前)

頗る美本

●定價金廿五錢 郵送料金四錢

△本書は二百五十人力を具したる學骨和尚の逸事奇談を面白く書き綴りたる珍書なりとす

エ、ア、M-93

◎連月説教

▲本書は毎月の説教を聞く餘暇なきものため座ながら法理を知らしめんとて出版せしもの也

◎聖僧乞食桃水

▲本書は理想のみを高き求めて實踐躬行の出來ぬ時勢的流行病の解熱丸也

◎佛教演説軌範

▲本書は時代に適する演説凡三十席を叙述す巧妙の辯雄大の筆實に天下の珍冊なり

◎婦人の鑑

▲本書は佛説玉耶女經を講義せしものにて佛教的婦人の必讀要書なり

◎禪門常用經典

▲此經は在家の人のために禪宗常用の御經廿餘種をノベ書に於てカナを附せしもの也

◎觀音經

▲此御經は娑婆有緣第一の觀音普門品をノベ書にしてカナを附せしものなり

◎小山靈鐘記

▲本書は偶々感ずる所ありて繁を省き簡を補ひ其文を訂し義を明かにし以て家庭の讀物とす

◎婦人讀本

▲本書は高田道見師の聖女の説法、かなのいはれ、加藤咄堂君の婦人講話、松浦百英師の夫婦の道父母の心得等を合本として世の家庭讀本とせしものなり

(高田道見師著) 全一冊

●代金參拾錢 送料金六錢

(編者 同斷) 全壹冊

●代金貳拾五錢 送料四錢

(加藤咄堂君著) 全壹冊

●代金四拾錢 送料六錢

(高田道見師著) 全壹冊

●代金貳參錢 送料貳錢

(全師 和譯) 全壹冊

●代金參拾六錢 送料四錢

(全) 全壹冊

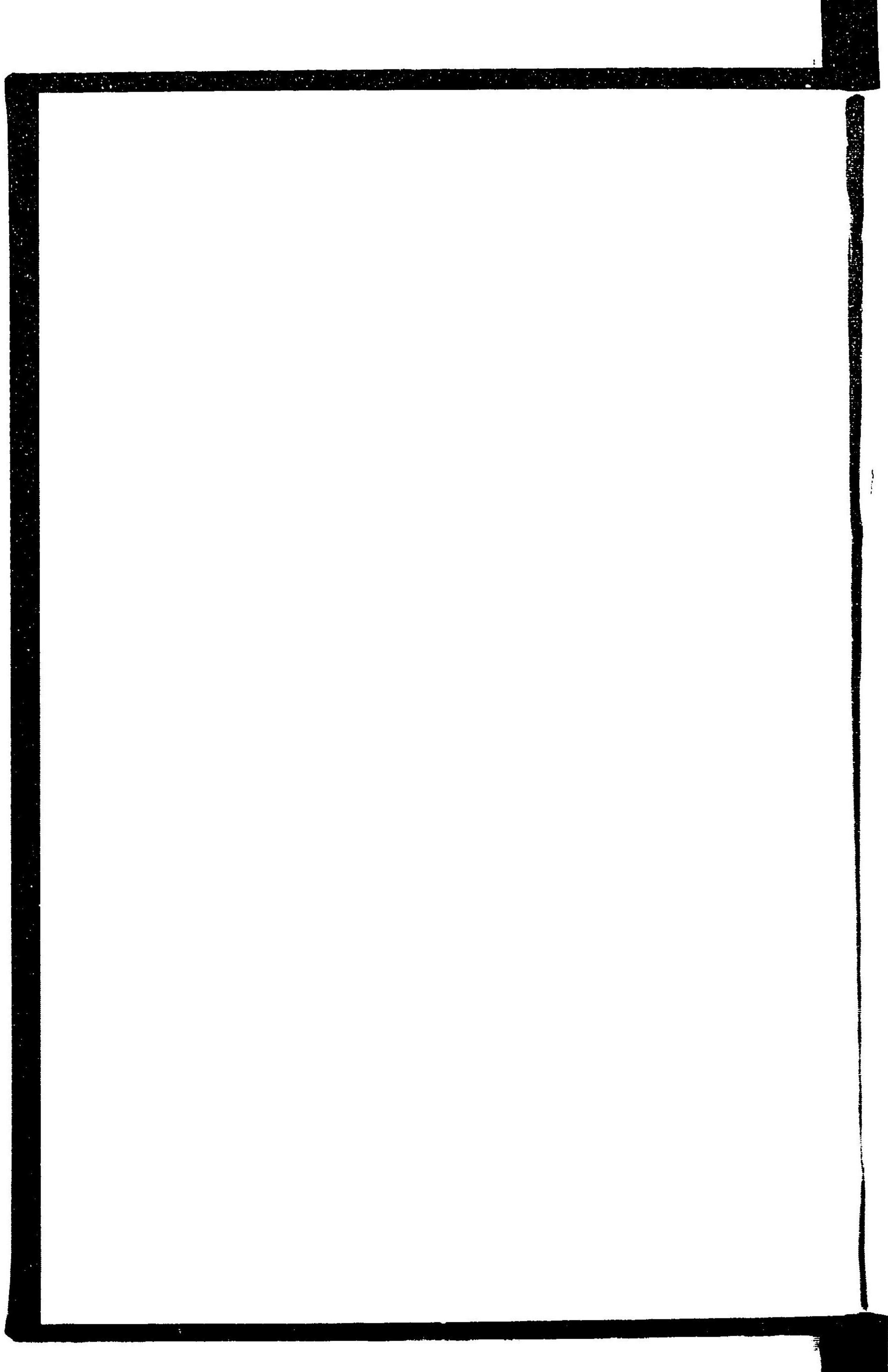
●代金六錢 送料貳錢

(培外道人校訂) 全壹冊

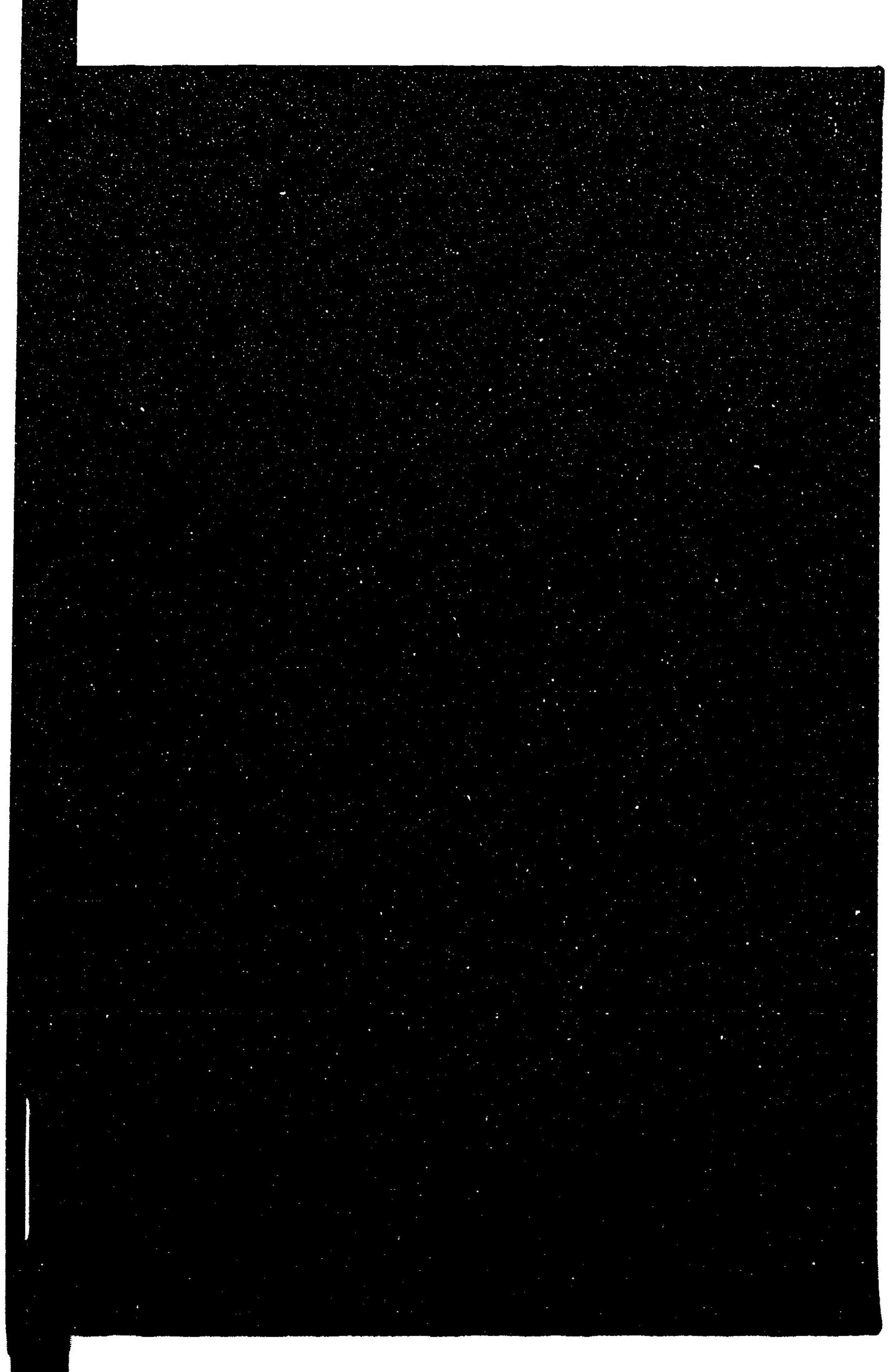
●代金廿八錢 送料四錢

(高田、咄堂、浦合著) 全壹冊

●代金六錢 郵稅二錢



Vertical line of text or a scanning artifact on the right edge of the page.



324

127

019508-000-7

324-127

授戒說教

泰禪/著

M42.4

ABG-0236



